

令和4年度卒業論文

ジェンダー越境的行動に対する許容度の非対称性

0100-31-9324

近藤碧

ジェンダー越境的行動に対する許容度の非対称性

京都大学文学部 4 年 近藤碧

目次

1. はじめに	1
2. ジェンダー越境的行動に関する先行研究	2
2. 1. 文化とジェンダー	2
2. 2. ジェンダー越境的行動およびジェンダー観形成についての先行研究	3
2. 3. 男性文化の優位意識と男性性	7
3. 研究の目的と仮説	8
4. 方法	9
4. 1. データ	9
4. 2. 質問紙の内容	9
4. 3. 分析ツールとデータの操作	10
5. 結果	11
5. 1. ジェンダー越境的行動に対する許容度の非対称性	11
5. 2. ジェンダー越境的行動に対する許容度を構築する要因	14
5. 2. 1. 回答者自身のジェンダー越境的行動の影響	14
5. 2. 2. 回答者の男性文化優位意識	21
5. 2. 3. 回答者の異性との交友割合	25
5. 2. 4. 回答者の男女別学経験	27
5. 2. 5. 回答者のきょうだい構成	29
5. 2. 6. ジェンダー越境的行動への許容度に対する回答者の所属集団の影響	31
6. 考察	33
6. 1. ジェンダー越境的行動に対する許容度の非対称性	33
6. 2. ジェンダー越境的行動に対する許容度の非対称性を構築する要因	35

6. 2. 1. ジェンダー越境的行動の経験.....	35
6. 2. 2. 男性文化優位意識	36
6. 2. 3. 異性との交友頻度	36
6. 2. 4. 男女別学経験.....	37
6. 2. 5. 回答者のきょうだい構成	38
6. 2. 6. ジェンダー越境的行動への許容度に対する回答者の所属集団の影響	39
7. まとめ.....	39
参考文献.....	40

1. はじめに

最近話題になっているジェンダーレス（ユニセックス）制服の紹介を見たとき、ふと違和感を覚えた。写っていたのはネクタイにスラックスを穿く男子生徒に、リボンにスカートを穿いた女子生徒、そしてネクタイにスラックスを穿いた女子生徒の3人。記事では、ジェンダーに囚われない選べる制服を謳っており、性別に関係なくネクタイとリボン、スラックスとスカートを選べると書かれている。それにも関わらず、リボンにスカートを穿いた男子生徒が出てこないのはなぜだろうかと疑問を抱いた。

このような違和感を覚えたことは初めてではない。「男がめそめそ泣くんじゃない」「女の子は少しおとなしいくらいがちょうどいいのよ」。このように、自身の生まれた性別によって性格や行動を規定されるような経験が、誰しも一度はあるのではないだろうか。私自身も幼い頃、女の子の人形で人形遊びをしていると「やっぱり女の子ねえ」と微笑まれ、恐竜の人形で人形遊びをしていると「女の子なのに恐竜が好きなのね」と目を丸くされたことを覚えている。同じ人形遊びでも、その対象によってこうも人の評価は異なるものなのかと子どもながらに驚いた。

私たちは生まれながらに生物学的にも社会的にも「男」と「女」の区別をつけられている。筋肉の付き方や胎盤など、生物学的な性差は暮らしの中でも男女の区別を形作る。たとえば古来ならば、力のある男が外へ出かけて狩猟や戦に精を出し、その間に女は家の仕事や子育てをすることは、非常に合理的なシステムであっただろう。

しかし時代が変わり社会の在り方が変容しても、この「男は外、女は家」という考え方は戦後長く日本の性役割規範として根付いてきた。鳥居千代香（2004: 17）は、「性別役割分業観が日本でできたのは明治末で、戦後の高度経済成長期に専業主婦とサラリーマンの夫という分業が明確になった」と指摘しており、梅田弘子（2022: 47）も日本の子育ての歴史は、戦後の高度経済成長期に性別役割分業意識に根ざして母親が中心であったことを指摘している。男が仕事に出て金を稼ぎ、女は家事と育児を行う。それは金を稼ぐのに腕力が必要なくなり、さらには技術も進歩して、仕事と家事・育児の間の隔たりが徐々になくなってきていたとしても、なかなか見直されなかった。その理由は価値観は世代を超えて連鎖するからだろう。父親が仕事に行き、母親が専業主婦として家事や子育てをするのを見て育った子どもは、それが当たり前なのだと思し、自分たちの人生もそういうものなのだと思い込んで疑わない。そして親もまた、自分たちの性的役割規範に基づき、己が子どもの手本になるよう振る舞って、子どもがそれぞれの役割を果たせるように教育する。男

なら強く勇ましく、社会の荒波に揉まれてもきちんと成果を残せるように。女なら慎ましくおしとやかに、家事や育児をこなして夫をサポートできるように。私たちは社会の様相を知る前から、知らず知らずのうちにジェンダー規範をすり込まれている。

通信技術が発達し、世界中どこでも繋がることができるようになったことは、人々が当たり前だとすり込まれていたジェンダー観を他の集団のそれと比べることを可能にした。性的少数者も認知され、近年では他国のように同性婚の法的承認を求める声も少なくない。けれども、世代を超えてすり込まれてきた価値観は先述したようにそれほど簡単に払拭できるものではない。男性性・女性性を中心としたジェンダー意識を調査した高井範子と岡野孝治（2009）は、自身の研究結果と約30年前に行われた同様の研究の結果がそれほど相違なかったことから、「男らしさ」や「女らしさ」に対する考え方は年月を経てもあまり変わらないことを指摘している。

そこで本稿では、「男らしさ」「女らしさ」という旧来のジェンダー規範に焦点を当て、性の多様化への過渡期にある現在の人々のジェンダー観を捉えることを目的とし、研究を行った。

2. ジェンダー越境的行動に関する先行研究

2. 1. 文化とジェンダー

「男らしさ」や「女らしさ」といったジェンダー意識は、特に文化において顕著にみられるのではないかと思われる。片岡栄美（2005: 66）は「『文化活動から男女いずれかのジェンダーをイメージするという認識パターン』が、かなり多くの人々に共有されているのではないか」と指摘し、また、「ジェンダー化した文化定義という知覚・評価図式」に基づき、「ジェンダー化した文化活動のイメージを拡大再生産し、さらには自らもその定義に基づいて実践しているのではないか」と述べる。つまり、茶道が趣味だと聞けば女性を思い浮かべ、スポーツ観戦が趣味だと聞けば男性を思い浮かべるということだ。片岡はこのことについて、様々な文化活動を挙げて、自身に子どもがいるとしたら、その子が大人になったときにどんな趣味や活動をしてほしいかを尋ねる調査を行った。子どもが男の子の場合と女の子の場合で分けて考えてもらったのだが、その結果、文化威信スコアの高いハイカルチャー活動（たとえばピアノや美術鑑賞など）は圧倒的に女の子に対して期待が高まり、逆に文化威信スコアの低い大衆文化活動（競馬などのギャンブルやカラオケなど）は男の子よりも女の子に対し「してもらいたくない」という回答率が高くなった。これを受けて

片岡は、日本において「男性向きの文化」と「女性向きの文化」が分けて考えられており、その活動を行うことによって「男らしい」あるいは「女らしい」と判断されていると推測している。

先にも述べたが、人々のジェンダー観は子どもの頃からすり込まれている。子どもに興味や習い事を始めさせるとき、当然子ども本人が何をしたいかということは十分考慮されるであろうが、子どもにどうあってほしいかという親の期待も少なからず関わってくるだろう。文化がジェンダー化の対象であること、そして子どもの頃から関わるものという点で、人々のジェンダー観を把握する大きな材料になると考える。

そこで今回は特に文化における人々のジェンダー観に着目し、男性文化に女性が参入する、あるいは女性文化に男性が参入するといったジェンダー越境的行動について研究を行った。

2. 2. ジェンダー越境的行動およびジェンダー観形成についての先行研究

ところで、冒頭で述べたジェンダーレスの制服にみられるように、近年ではジェンダーの多様化を受け入れようとする動きが高まり、従来の男と女に二分されるジェンダー規範が見直される傾向がある。しかし、それぞれの性別で「男らしさ」「女らしさ」の払拭度合いは違っているように感じられる。

たとえば、「ボーイッシュな女の子」は以前からファッションとして広く認知され、世間からも肯定的な評価を得ているが、一方で「ガーリッシュな男の子」という言葉はほとんど聞かない。また、男性が女性のファッションを身につけることは、しばしば奇異な目で見られることもある。

飯野智子（2013）はエステティックサロンの宣伝部長にインタビューをし、エステティックサロンを利用している男性客の多くが恥ずかしさや、サロンを利用していることを人に知られたくないという思いを抱いていることを指摘している。加えて、エステティックサロンは他の人よりも特に美意識が高い男性が利用しているわけではなく、メタボリックシンドロームと診断されたがゆえに痩せるために仕方なく、と消極的な理由で利用している人が多いことも明らかになった。この調査には、男性が美意識を持つことに抵抗感を抱いていることが示されている。

谷本奈穂・西山哲郎（2009）は、読者モデルやセミプロのモデルである「おしゃれが好きだ」と公言する4人の男性にインタビューを行ったが、その結果、おしゃれな男性には

女性の持つ身体観に近いような意識（別の調査で、おしゃれをする理由を調べたところ、男性は「異性にもてたいから」、女性は自分のためや同性を意識しておしゃれをするという結果が出ている）があることが分かり、「おしゃれ=男らしくない」というイメージ通りであるとの主張が可能だと述べている。また、女性の美容整形や化粧品については年齢を問わず賛成していた 4 人であったが、普段から男性が化粧品をすることには否定的な目を向けていたものの、その理由に具体的なものはなく、「化粧品は男性がする感じではない」といった曖昧なものだったという。ここからは、おしゃれが女性のものであり、そこに男性が参入することに違和感を覚えること、そしてその違和感の理由に具体性がなかったことより、「化粧品は女性のもの」という漠然としたジェンダー規範が強く影響しているものと思われる。

また他にも、西岡敦子（2012）が、インターネット上の Q&A コミュニティにおいて、「家族もしくは恋人が急に化粧品をしたいと言い出した」という旨の質問を探したところ、「夫が突然化粧品をしたいと言い出した」という妻からの質問があった。その質問への回答は 35 件存在し、内 26 件が男性化粧品に賛同するものであったものの、その 26 件の内 17 件は「外出せず家の中だけなら良い」「家に子供がいらないのなら良い」といった、世間からの視線を気にするものや子どもへの影響を不安に思う条件付きの賛同であったという。一方反対意見は約 4 分の 1 しかなかったが、絶対に男性は化粧品をするものではないという強い思い込みを反映した意見がほとんどであった。化粧品をする男性について議論している掲示板サイトでは、男性に化粧品をしてほしくないという意見もあったが、その理由のほとんどは、男性が化粧品をすることに対する嫌悪感や、化粧品は女性がするものといった内容であったという。SNS サイトのコミュニティ管理者とその参加者に意見を求めたところ、男性の化粧品に関しては良くない印象を抱いている人も一定の割合で存在し、現状では男性の化粧品が受け入れられているとは言いがたいことが明らかになった。しかし、化粧品をしたい男性や、普段から化粧品をしているという男性、男性にも化粧品をしてほしい、あるいは一緒にしたいという女性もおり、これから男性の化粧品が認められていく可能性も十分にあると考えられると西岡は述べている。興味深いのは、男性が化粧品をしていることに賛同する回答の半数以上が世間の目や子どもへの影響を懸念しているという点である。それは、個人的には男性が化粧品をしても構わないと思っているが、世間では男性が化粧品をすることは好ましく思われていないと回答者が感じているからであり、化粧品をする男性を子どもに見せることを躊躇うという思いもまた、子どもに男性が化粧品をすることを当たり前だと思ってほし

くないという、男らしさのジェンダー教育意識があるからではないだろうか。相手を一個人として見た場合と、社会の一員として見た場合とで、許容度が変わることがうかがえる。

小川麻衣 (2018:55) は、1990 年代に流行した「フェミ男」を雑誌から分析したが、その中で雑誌『オリーブ』の読者アンケートで付き合いたい男性芸能人の 1 位に入ったフェミ男のいしだ壱成が、付き合いたくない男性芸能人にもランクインしていることについて言及し、ジェンダー意識の変化に敏感な女性と保守的な女性の間で対照的な人気になっていることを指摘している。フェミ男とは、1993 年から 1994 年にかけて若者に流行した、女性的な出で立ちをした少年のことである。彼らへの評価が二分していることから、多様性を認める意識と男性には「男らしさ」を求める意識とが混在していることが読み取れる。

ファッション以外の例を挙げれば、少年漫画を読む女性に比べ、少女漫画を読む男性は少ないことも指摘されている。石井照久・川邊聡子・今野大樹・松本勇紀・目黒耕平・立花希一・望月和枝 (2011) は秋田大学生を対象に、マンガを読むことについてどのような男女差があるのか、加えて、学生の性別ごとに、それぞれが好む作品がどのようなものなのかについて、アンケート調査を行い解析した。調査の結果、女子学生は少年マンガと少女マンガの両方を読む人が 73% 近く存在し、少年マンガだけを読んでいる女子学生も少数ではあるが存在したのに対し、男子学生では少年マンガだけを読む割合が半数にのぼり、少女マンガだけを読む学生はいなかった。「少年マンガだけを読む」理由に関して、男子学生は面白いことを理由に挙げた人が圧倒的に多かったが、少女マンガを買うことへの抵抗感や少女マンガを読むことへの恥ずかしさに関する回答もあった。男性が少女マンガを読まない理由としては、女性文化に触れることは社会から批判的な目で見られ、そのことを感じ取っているためだと考えられると石井らは述べている。

團康晃 (2014) は、高校 3 年生の男女に対し、小学 4 年から高校 3 年までの各年で、どのような雑誌を読んできたかを調査した。その結果、石井らの研究結果と同じく、女性はほとんど全ての年代で『週刊少年ジャンプ』や『月刊コロコロコミック』といった少年漫画雑誌を講読していたのに対し、男性に少女漫画雑誌は読まれていないことが明らかになった。

この 2 つの調査から、漫画に対する男女のジェンダー越境的行動に非対称性が見られることが分かる。

では、人々のジェンダー観はどのように形成されるのか。多々納道子・若築純子 (2003) は、中学生のジェンダー観がどのような要因によって形成されるのかを明らかにするため、

中学校 6 校から中学 3 年生の男女計 658 人を対象にアンケート調査を行った。調査を行ったのは、きょうだいの構成や祖父母との同居状況、母親の就労状況、男女の特性、性別役割分業意識、ジェンダー観、家庭の仕事の実践状況、両親にみる家庭の仕事の実践状況、家庭でのしつけや学校での教育などの項目であった。調査の結果、ジェンダー観形成における男子への影響は、「学校での性役割の期待度」が最大レンジ（カテゴリースコアの範囲）を示し、「きょうだいの構成」が次に高いレンジであった。一方女子では、最も大きく影響したのは男子と同じく「学校での性役割の期待度」であり、「母親の就労状況」、「親の家庭の仕事の分担状況」、「勉強と家事についての考え方」が高いレンジで続いた。ここから、男女ともにジェンダー観形成に最も影響した要因が、学校での性役割期待であることが明らかとなった。ここからは、家庭環境とともに学校でのジェンダーに関する周囲の意識が、本人のジェンダー観形成に影響を与えていると考えられると、多々らは指摘する。

池谷壽夫（2019）は、男子の算数や数学の成績が、国語での女子の優位に比べると男子が少し高い程度であるにも関わらず、男子は理系で女子は文系という意識はすでに中学段階で形成され固定されていると指摘した。加えて、この思い込みを促進する要因として、教師の男女構成や教師の男女特性論の肯定、親から子への専攻に対するステレオタイプな思いを挙げている。そして文理選択で男女の構成比に違いがあると、女子には理系職の女性モデルがほとんどおらず、逆に男子には文系職の男性モデルが少なくなるため、自ずと男子は理系を、女子は文系を選びやすくなると池谷は述べる。

以上の先行研究から分かることは2つである。1つは、やはり女性向け、男性向けと区別されているサブカルチャーに対して、女性が男性向けのものを好むより、男性が女性向けのものを好むことの方が社会に受け入れられていないのではないかということだ。特にファッションの研究に関して、男性的なファッションをする女性の研究よりも、女性的なファッション（化粧を含む）に興味を示す男性の研究が多いことも、それが研究者の知的好奇心を掻き立てるほど「不思議な」ことだからなのだろう。そしてもう1つは、ジェンダー観形成について、中学生になる頃にはジェンダー観が形成されており、それは学校での経験が大きく影響しているということだ。

一方、女性が男性文化を好むことに対する研究は少なく、またジェンダー越境的行動をする当事者についての研究に対して、周囲の人々の評価についての研究は圧倒的に少ない。加えてここ3年以内の研究はほとんど見当たらず、人々のジェンダー観の現状を把握できているとは言いがたい状況である。

2. 3. 男性文化の優位意識と男性性

男性が女性文化に参入する方がその逆よりも許容されにくいという理由については次の2つの観点から考えることができる。1つは男性優位社会に基づく文化階級の差であり、もう1つはミソジニーやホモフォビアの考え方である。

ジェンダー問題において歴史の中でも重要なキーワードは、女性解放、つまりは男女平等社会の実現であっただろう。世界のあちこちで男性優位の社会が築かれ、女性は男性を支える立場として扱われてきた。Pierre Bourdieu (1998=2017: 132) は著書『男性支配』の中で職業における男女の格差構造について、女性の割合が高くなる地位とは、すでに評価が落ちているか落ちる傾向にあり、それは評価の下落が、評価の下落が促した男性の離職によって雪だるま式に加速するからだと述べている。つまり、男性たちが評価の下落により見限った立場を、あるいは男性たちが昇進した穴を、女性が埋めるというのである。この例のように、男性優位社会では常に男性が評価の高い立場を得、女性が評価の低い立場を強いられる。そして男性=高評価、女性=低評価という図式が人々の意識に強く根付いてしまうことで、男性のなすことは高尚なことであり、女性がなすことは低俗であるという意識をも生んでしまうのではないだろうか。たとえば一日中家事や育児に追われる主婦に対し、夫が「自分は一日働いている」ことを理由に妻を見下すような発言をすることも、男がなす「仕事」は女がなす「家事・育児」よりも価値の高い行為であるという認識のためであろう。

一方ミソジニーとホモフォビアはそれぞれ「女性蔑視」、「同性愛嫌悪」と訳される概念である。上野千鶴子(2010: 29)は「ホモソーシャリティは、ミソジニーによって成り立ち、ホモフォビアによって維持される」と述べているが、これはつまり、男性同士の連帯は性的主体としての男から女を排除し、また男になり損ねた男、あるいは女のような男というべき存在を排除することで維持されているということである。男性は自分が「男である」ことを証明するため、常に自分がいかに女性とは違っているのかを示し続けなければならないのだ。さらに上野(2010: 30)は、男とも女ともつかない中間的なジェンダー「第三の性」が存在するという論に対し、このカテゴリーの人間は、生物学的には男性であり、女性性の記号によって「女性化」されているなどの特徴を持っている「男でありながら男になりそこねた男」「女性化された男」であるため、男だけが「第三の性」に移行することがありえ、女が「第三の性」に移行することはないのだと指摘している。

これらの指摘を解釈すれば、女性は何をしようと「女性」のままであるが、男性は行動に

よってその性が揺らぎ得るということであり、それゆえに、女性がジェンダー越境的な行動を取ることに對する人々の意識は寛大（関心が低い）であるが、男性に対しては厳しい（関心が高い）という違いが生まれるのではないだろうかと考える。

3. 研究の目的と仮説

本研究における主要な問いは次の2つである。1つは、ジェンダー越境的な行為に對する京大生の許容度はどのようなものであるか、もう1つは、上記のジェンダー観を形成するに当たって、それぞれが属してきた集団はどのように影響するのか、というものだ。

サブカルチャーには「少年漫画と少女漫画」や、「メンズファッションとレディースファッション」など、名称として明らかに対象を性別で分けているものがいくつか存在する。人々がこれをどのように受け止め、他者のジェンダー越境的行動に對してどのような意識を持っているのかを明らかにしたい。

1つ目の問いに對する仮説は、男性が女性文化に参入することに対する許容度の方が、女性が男性文化に参入することに対する許容度よりも低くなるというものである。これは、石井ら（2011）が、少年マンガを読む女子学生は多いのに対し、少女マンガを読む男子学生は少ないという結果を明らかにしたことや、2章で述べた男性文化優位意識やミソジニーとホモフォビアの考え方を理由としている。

2つ目の問いに對する仮説は、異性との関わりが多いほど異性文化への参入に對する許容度が高くなり、特に小・中学生までの経験が最も大きな影響を与えるのではないかと考える。多々納と若築の調査（2003）でも、中学生のジェンダー観には学校での性的役割期待が大きく影響していることが明らかにされていた。加えて、特に漫画やアニメなどには幼少期から触れている人も多く、友人を作る際にも、自分と趣味が合う人を選ぶことも少なくない。幼少期に何を好むかで、その後の交友関係にも影響が出てくるのではないかと考える。

また今回の調査では、京大生のジェンダー越境的行動の経験と他者の越境的行動への許容度の関係、京大生の男性文化優位意識と他者の越境的行動への許容度の関係も合わせて調査した。前者に對する仮説は、ジェンダー越境的行動経験のある回答者ほどその行為に對する許容度が高くなるというものだ。自分がジェンダー越境的行動を行うことで、他者が同じく越境的行動をすることへの理解が深まるのではないかと考えるからである。また、後者に對する仮説は、男性文化優位意識の高い回答者ほど男性がジェンダー越境的行動を

することに対して許容度が低くなるが、女性が行うことに関しては男性文化優位意識は許容度に影響しないというものだ。男性文化優位意識の高い人は、男性文化の方が女性文化と比べて上位文化であると考えている。そのため、文化的に低い立場の女性が上位の男性文化に参入しようとする、つまり文化的地位を向上しようとするのは自然なことであるが、上位にいる男性が下位である女性文化に参入する、つまり文化的地位を下落させることに對して許容度が低くなると考えられるからだ。

4. 方法

4. 1. データ

本研究の調査では、京都大学の学生を対象にし、2022年10月24日から2022年11月13日までの期間において、ジェンダー越境的行動の評価に関する質問紙調査を行った。質問紙はインターネット上のGoogle Formを用いて作成し、SNSアプリのLINEを通じて京都大学の学生に拡散して、インターネット上で回答を得た。また、京都大学で金曜2限に開講されている『認知心理学II』の授業、金曜4限に開講されている『日本史学(特殊講義)』の授業の最後に、出席している学生にアンケートへの協力を呼びかけた。加えて文学部で開講されている『系共通科目(メディア文化学)(講義a)』の受講者に向けて、サイトのお知らせにアンケートへのリンクを掲載してもらった。

京都大学の学生に限定した理由は、学歴などの条件をある程度統一させるためである。回答数は計108名で、男女の内訳は男性55名、女性51名、回答しない2名であった。

4. 2. 質問紙の内容

まず問1では、回答者のジェンダー越境的行動への不快感を尋ねた。「女性がメンズの衣服を着用する」「男性がレディースの衣服を着用する」「女性が男性誌を読む」「男性が女性誌を読む」「女性が少年漫画を読む」「男性が少女漫画を読む」「女兒が男児用玩具で遊ぶ」「男児が女兒用玩具で遊ぶ」の8つの項目に対し、それぞれの程度違和感を覚えるのかを、「全く違和感を覚えない」から「非常に違和感を覚える」の5段階で評価してもらった。ここで対象となる物をあえて具体的な名称にしなかったのは、回答者自身の価値観で、男性向け、あるいは女性向けのものを想起してもらうためである。調査の目的は、ジェンダー越境的な行動に対する人々の意識を調査することであるため、回答者自身の中にある性別の垣根を越えることをどう考えるか、という意識を調査するにおいて、具体的なものを

提示しなくても十分ではないかと考えた。なお、この質問における「男性/女性」は回答者と面識のない人物を想定し、偶然その場面を見かけたときの第一印象を回答するよう文面で指示した。

続いて問2では、回答者自身がジェンダー越境的行動をとっているかを尋ねた。「あなたは今現在、次のような行動をとることがどの程度ありますか」と尋ねた上で、「異性を対象とした衣服を着用する」「異性を対象とした雑誌を読む」「異性を対象とした漫画を読む」の3つの項目についてそれぞれ、「全く経験がない」から「常に異性を対象としたものを着用する/読む」までの5段階で頻度を回答してもらった。

さらに問3では、評価に文化階級の意識がジェンダー越境的行動の評価に影響しているのかを調べるため、意識調査を行った。「少年漫画の方が、少女漫画よりも話の内容が深い」「男性誌の方が、女性誌よりも読み応えがある」「男性服の方が、女性服よりもフォーマルである」という3つの質問を用意し、それぞれに対して「そう思う」から「そう思わない」の5段階で回答してもらった。

最後に問4で、回答者が所属してきた集団を尋ねる質問をいくつか行った。回答者の性別のほか、学部やきょうだい構成、男子校や女子校に通っていた経験を尋ね、同性と異性それぞれとの関わりがどのようであったかを明らかにした。学部は、学部生には今現在所属している学部を、大学院生には学部生のときに所属していた学部を選択してもらった。きょうだい構成では、全国家族調査(NFRJ)のきょうだいに対する質問を参考とし、一番年上のきょうだいから順に、最大5人までの続柄(兄・姉・弟・妹)を回答してもらった。また、異性とどの程度交友関係を持ってきたのかを、小学生時代、中学生時代、高校生時代、大学生時代に分けて回答してもらった。回答は5段階で、「ほぼ同性と交友」を1、「異性と交友するが同性の方が多い」を2、「異性と同性の交友は半々くらい」を3、「同性と交友するが異性の方が多い」を4、「ほぼ異性のみと交友」を5と定めた。また、ここでの「交友」とは、一時的(一言二言のやり取りなど)・強制的(授業中に割り当てられたグループでのやり取りなど)ではなく、回答者自身が積極的に行ったやり取りのことを指すと定義し、質問紙の文面上に明記した。

4. 3. 分析ツールとデータの操作

今回の調査の分析には、R Core Team (2022)によるフリー統計ソフトの「R」を用いた。

またデータに関して、質問紙の問1には、それぞれのジェンダー越境的行動について、

「全く違和感を覚えない」に1、「非常に違和感を覚える」に5という数値を定め、違和感を覚えるほど数値が高くなるよう設定した。そのため、分析の際には回答の数値をそのままジェンダー越境的行動への不快感とし、数値が高くなればなるほど、ジェンダー越境的行動に違和感を覚える、つまりは許容度が低いことを示すこととなった。

5. 結果

5. 1. ジェンダー越境的行動に対する許容度の非対称性

質問紙の問1で回答してもらったジェンダー越境的行動への不快感において、行動主体の性別ごとに各項目の平均値不快感を算出し、それぞれの平均不快感の差にt検定を行った。各平均不快感と標準偏差は以下の表1の通りである。

表1. ジェンダー越境的行動への平均不快感（標準偏差）（行動主体者の性別ごと）

	行動主体：女性	行動主体：男性	P 値
衣服を着る	1.481 (0.676)	3.324 (1.057)	0.000
雑誌を読む	1.963 (1.102)	2.602 (1.127)	0.000
漫画を読む	1.130 (0.455)	2.213 (1.208)	0.000
玩具で遊ぶ	1.667 (0.875)	2.407 (1.253)	0.000

衣服に関しては、主体者が男性である方が平均不快感はおよそ 1.843 高くなり、雑誌ではおよそ 0.639、漫画ではおよそ 1.083、玩具ではおよそ 0.741 だけ主体者が男性の方が平均不快感が高くなった。これらそれぞれの項目の平均不快感については、全て 0.1%水準で有意であった。全ての項目で行動主体が男性のときの方が女性のときよりも平均不快感が高くなったことから、このことは「男性が女性文化に参入することに対する許容度の方が、女性が男性文化に参入することに対する許容度よりも低くなる」という仮説を支持する結果であるといえる。

次に、回答者の性別で分類してそれぞれの平均不快感を算出し、その差のt検定を行った。質問紙では、性別の回答は男、女、回答しないの3択だったが、ここでの分析には「男」あるいは「女」と回答した回答者のデータのみ使用し、「回答しない」を選択した2名の回答は分析の対象外とした。結果は以下の表2と図1にまとめている。

表 2. ジェンダー越境的行動への平均不快感（回答者の性別ごと）

	回答者：女性	回答者：男性	P 値
問 1 全体	2.098	2.107	0.915
女性がメンズ服	1.314	1.655	<u>0.008</u>
男性がレディース服	3.333	3.345	0.953
女性が男性誌	2.255	1.691	<u>0.009</u>
男性が女性誌	2.882	2.345	<u>0.012</u>
女性が少年漫画	1.098	1.164	0.465
男性が少女漫画	1.941	2.473	<u>0.022</u>
女兒が男児用玩具	1.627	1.709	0.633
男児が女児用玩具	2.333	2.473	0.567

(5%水準で有意差がみられたものの P 値に下線を引いている)

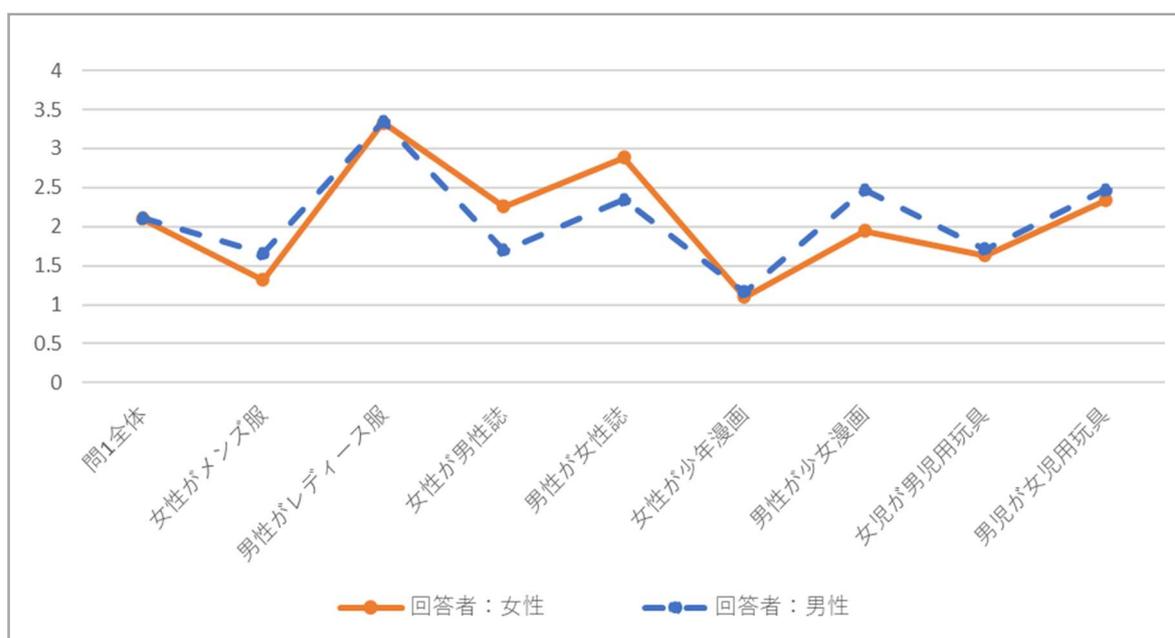


図 1. 回答者の性別ごとの問 1 の平均不快感

問 1 全体の平均不快感をみると、男性回答者の方が女性回答者よりもジェンダー越境的行動に対する不快感が高い、つまり許容度は低い結果となったが、有意差はみられなかった。

各項目でみると、衣服を着用すること、漫画を読むこと、玩具で遊ぶことに関しては男性回答者の方が女性回答者よりもジェンダー越境的行動への許容度が低くなり、雑誌を読むことに関してのみ、女性回答者の方が許容度が低くなった。ただし、回答者の性別による差が有意であったのは、女性がメンズの衣服を着用する、女性が男性誌を読む、男性が女性誌を読む、男性が少女漫画を読む場合の4つであった。

さらに、行動主体者の性別と回答者の性別の交互作用効果を算出した。下の表の Model1 は主体効果、Model2 は交互作用効果の結果である。なお、この分析はデータをロングフォーマットにして行っている。

表 3. ジェンダー越境的行動の評価における、行動主体者の性別と回答者の性別の交互作用効果

	Model 1	Model 2
(Intercept)	1.56 *** (0.06)	1.57 *** (0.07)
回答者 男	0.01 (0.07)	-0.02 (0.10)
行為主体 男	1.08 *** (0.07)	1.05 *** (0.11)
回答者 男:主体者 男		0.06 (0.15)
R ²	0.20	0.20
Adj. R ²	0.20	0.20
Num. obs.	848	848

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

行動主体者の性別と回答者の性別の交互作用効果は 0.06 となったが、有意にはならなかった。

5. 2. ジェンダー越境的行動に対する許容度を構築する要因

5. 2. 1. 回答者自身のジェンダー越境的行動の影響

問 2 で得た、回答者のジェンダー越境的行動の頻度のデータを用い、衣服、雑誌、漫画の 3 項目に分けてジェンダー越境的行動の不快感への影響を分析した。

まず、今回の回答者がどの程度ジェンダー越境的行動をとっているのかを数値化した。問 2 の回答に対し、「全く経験がない」に数値 1 を、「時々異性を対象とした衣服を着る/読む雑誌の一部は異性を対象としたものである/読む漫画の一部は異性を対象としたものである」に数値 2 を、「半分くらい異性を対象とした衣服を着る/読む雑誌の半分程度は異性を対象としたものである/読む漫画の半分程度は異性を対象としたものである」に数値 3 を、「高い頻度で異性を対象とした衣服を着る/読む雑誌の過半数が異性を対象としたものである/読む漫画の過半数が異性を対象としたものである」に数値 4 を、「衣服は常に異性を対象としたものを着る/雑誌は異性を対象としたものしか読まない/雑誌は異性を対象としたものしか読まない」に数値 5 を与えた。この操作により、ジェンダー越境的行動の頻度が高いほど、高い数値を獲得することになった。

この結果をまとめたのが、以下の表 4 である。なお、差の検定は t 検定を行った。

表 4. 各ジェンダー越境的行動についての頻度の平均値（回答者の性別ごと）

	回答者：女性	回答者：男性	P 値
3 カテゴリー全体	2.268	1.491	0.000
異性を対象とした衣服を着る	2.059	1.291	0.000
異性を対象とした雑誌を読む	1.804	1.400	0.006
異性を対象とした漫画を読む	2.941	1.782	0.000

どの項目をみても、男性に比べて女性の方が有意にジェンダー越境的行動をとる頻度が高かった。回答者の男女差は、漫画についてが最も大きく、次いで衣服の着用、最も小さかったのは雑誌についてであった。また、異性を対象とした衣服を着用することや、異性を対象とした雑誌を読むことに関しては、「経験なし」以外の項目では常に女性の方が多く、

また「高い頻度」あるいは「過半数」の経験があると回答した女性がいたのに対し、男性は「半分」の経験があるに留まった。漫画に関しても、「一部」経験があると回答した数は女性よりも男性の方が多かったものの、それ以上の経験を答えた回答者は男性よりも女性の方が多く、常に異性を対象とした漫画を読むと回答したのは女性だけであった。

次に、ジェンダー越境的行動の頻度が他者のジェンダー越境的行動への許容度にどのように影響するのかを分析した。結果は以下の図2から図4の通りである。なお、分析はロングデータで行っており、各人につき行動主体が男女の2項目あるため、各図中のnは実際の回答数の2倍になっている。

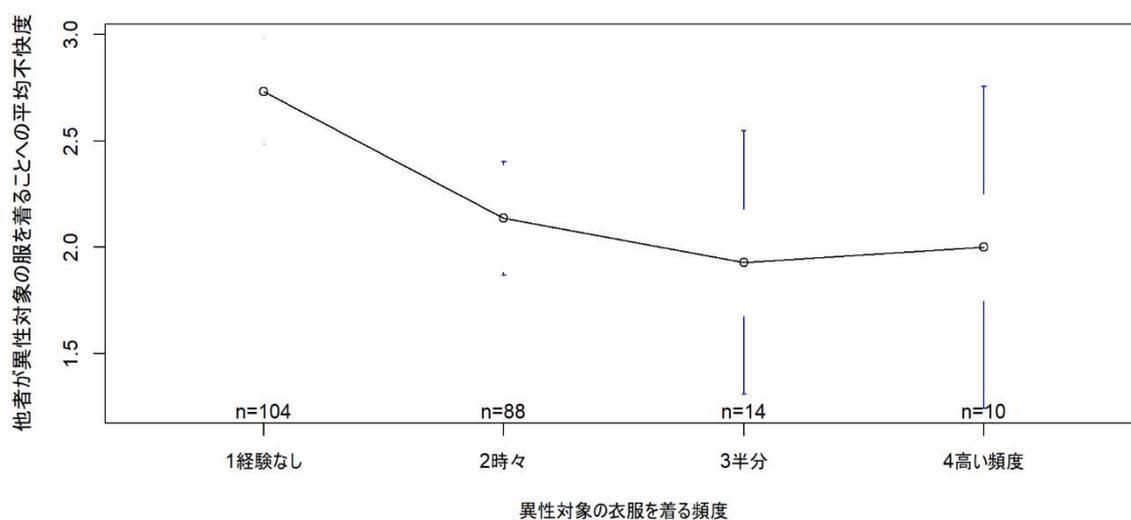


図 2. 回答者の異性を対象とした衣服を着る頻度別の、他者が異性を対象とした衣服を着ることへの平均不快度

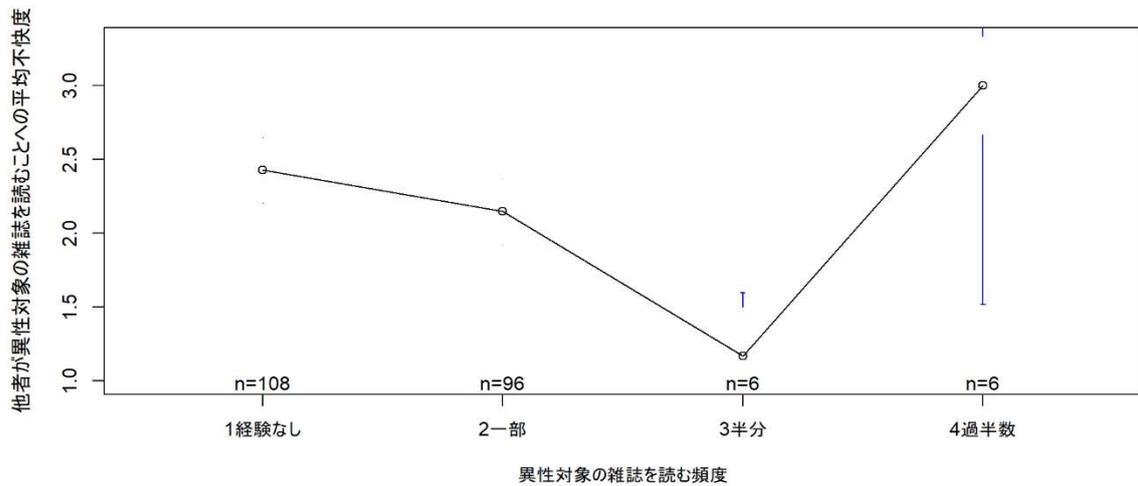


図 3. 回答者の異性を対象とした雑誌を読む頻度別の、他者が異性を対象とした雑誌を読むことへの平均不快感

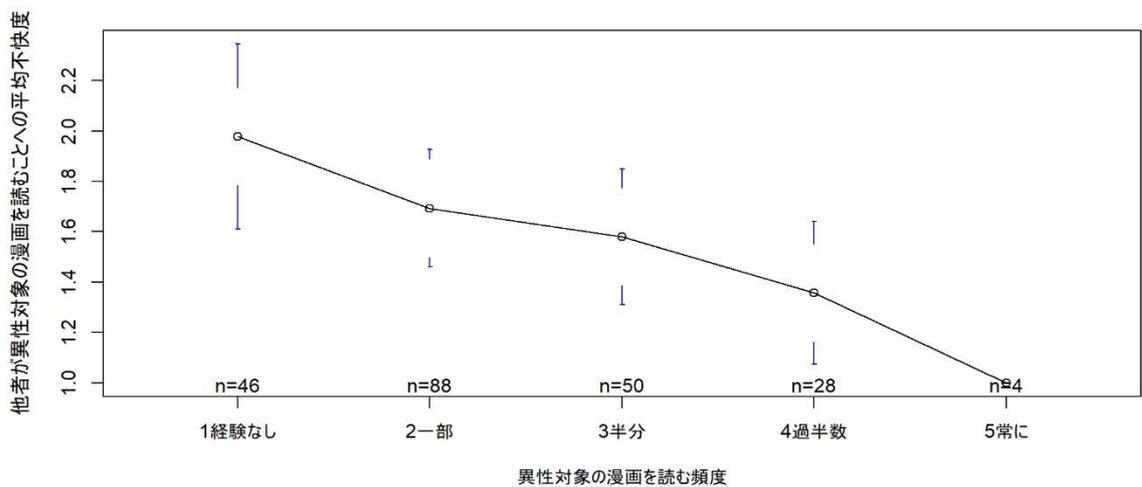


図 4. 回答者の異性を対象とした漫画を読む頻度別の、他者が異性を対象とした漫画を読むことへの平均不快感

衣服では、異性を対象とした衣服を着用した経験がないと回答した人の、衣服に関するジェンダー越境的行動への平均不快感が最も高く、頻度が時々、半分くらいと高くなっていくほど平均不快感は低くなった。しかし、高い頻度で異性を対象とした衣服を着用すると回答した人の平均不快感は、半分程度着用すると回答した人の平均不快感よりも高くなった。回答者のジェンダー越境的行動の頻度と平均不快感の相関係数は-0.224 で有意であり (p 値は 0.001)、Tukey-Kramer 法による多重比較での差の検定では、有意差は「経験な

し」と「時々」の間にのみみられた (p 値は 0.006)。なお、常に異性の衣服を着用すると回答した人はいなかった。

雑誌でも、経験がないと回答した人の平均不快感よりも、読む雑誌の一部は異性を対象としたものであると回答した人の平均不快感の方が低くなり、さらに読む雑誌の半分程度は異性を対象としたものであると回答した人の平均不快感の方がより低くなった。しかし、読む雑誌の過半数は異性を対象としたものであると回答した人の平均不快感が最も高くなった。回答者のジェンダー越境的行動の頻度と平均不快感の相関係数は-0.080 で有意差はみられず、Tukey-Kramer 法による多重比較での差の検定では、有意差がみられたのは「経験なし」と「半分程度」、「半分程度」と「過半数」のみであった (前者の p 値は 0.043、後者の p 値は 0.029)。なお、こちらも常に異性の雑誌を読むという人はいなかった。

漫画では、読む漫画のうち異性を対象としたものの割合が高くなるほど、平均不快感は低くなった。ただし、衣服や雑誌に比べると、ジェンダー越境的行動経験の各頻度間の差は小さかった。回答者のジェンダー越境的行動の頻度と平均不快感の相関係数は-0.192 で有意であり (p 値は 0.005)、Tukey-Kramer 法による多重比較での差の検定では、いずれの頻度間でも有意差はみられなかった。

全体的に、基本的なグラフの形としては衣服と雑誌は半分以上越境行動をすると回答した人を除けば右肩下がりとなり、漫画は完全な右肩下がりのグラフになっている。しかし、雑誌は行動の頻度と平均不快感の相関係数が有意にならず、有意であった衣服と漫画においても全ての頻度間の差が有意ではなかったため、必ずしもジェンダー越境的行動経験があればあるほど、他者のジェンダー越境的行動への許容度が高くなるとはいえないという結果になった。したがって、「ジェンダー越境的行動経験のある回答者ほどその行為に対する許容度が高くなる」という仮説は必ずしも支持されなかった。

さらに詳しく要因を分析するため、回答者の男女別かつ行動の主体者の男女別での分析も行った。その結果が以下の図 5 から図 10 である。

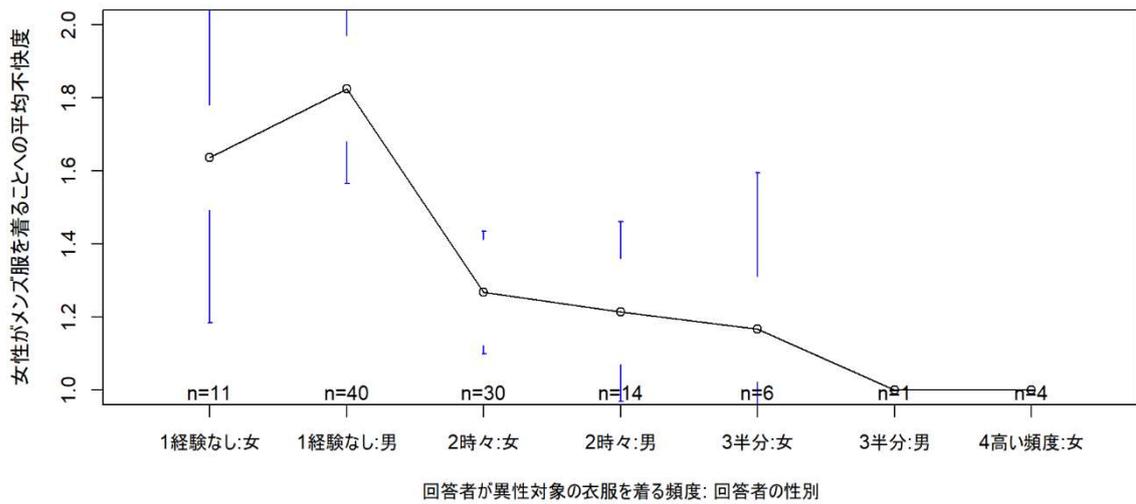


図 5. 回答者の性別と異性を対象とした衣服を着る頻度別の、女性がメンズ服を着ることに対する平均不快度

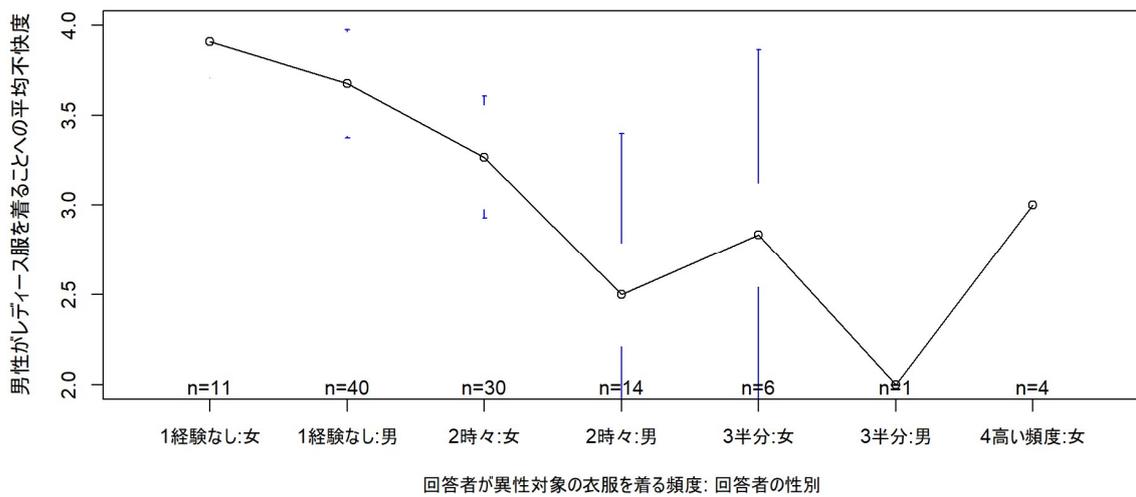


図 6. 回答者の性別と異性を対象とした衣服を着る頻度別の、男性がレディース服を着ることに対する平均不快度

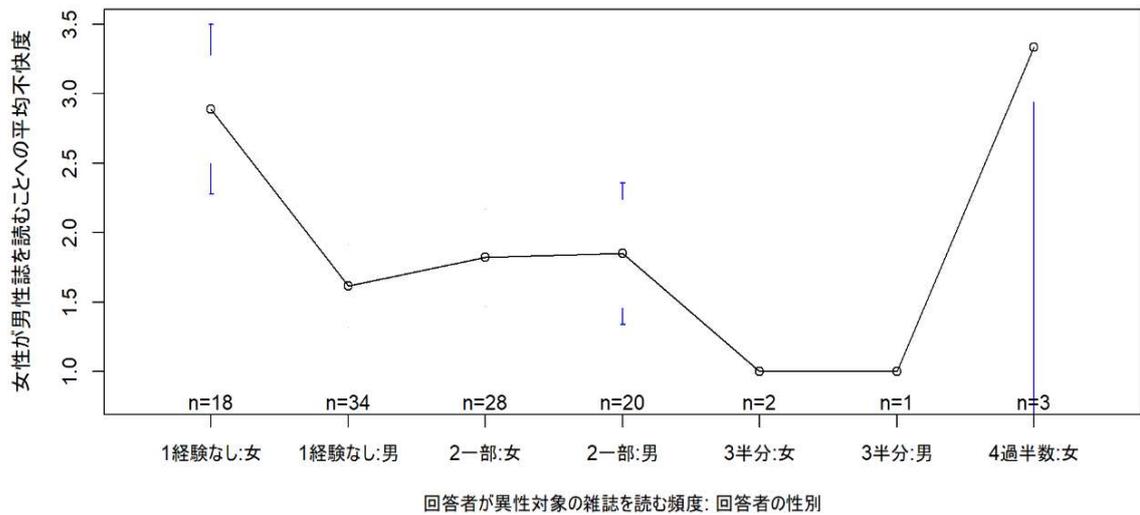


図 7. 回答者の性別と異性を対象とした雑誌を読む頻度別の、女性が男性誌を読むことに対する平均不快度

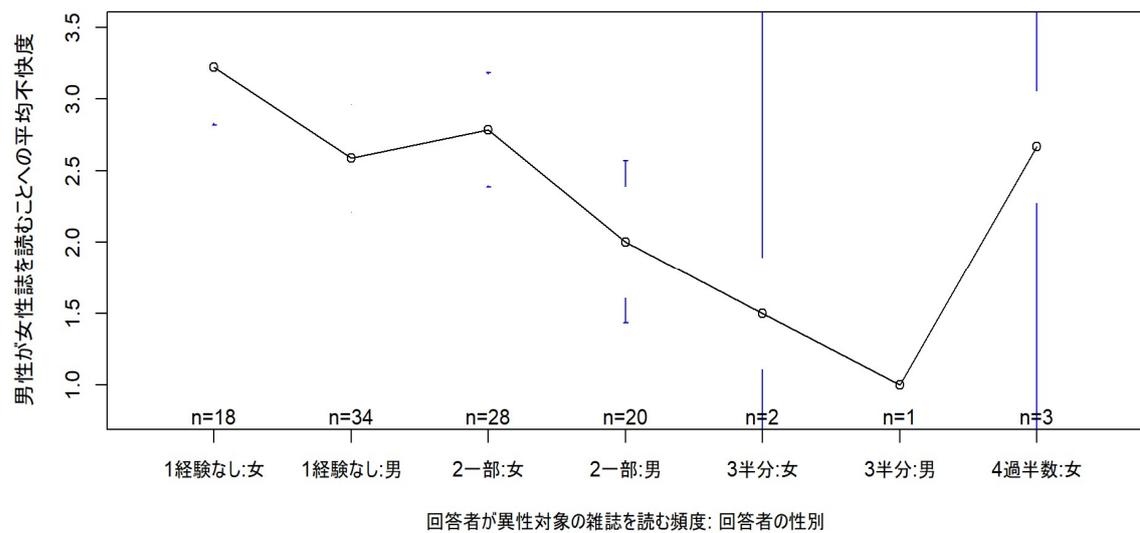


図 8. 回答者の性別と異性を対象とした雑誌を読む頻度別の、男性が女性誌を読むことに対する平均不快度

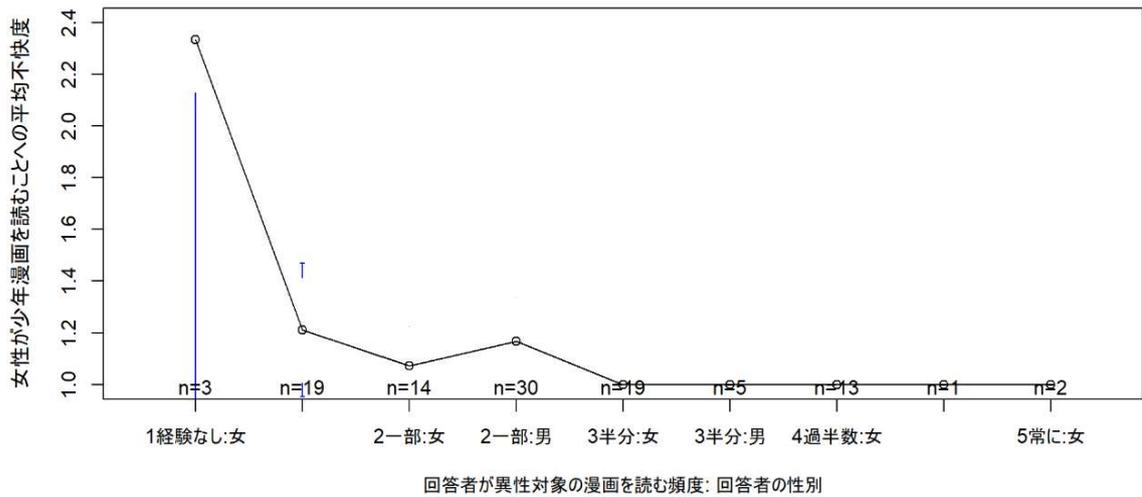


図 9. 回答者の性別と异性を対象とした漫画を読む頻度別の、女性が少年漫画を読むことに対する平均不快度

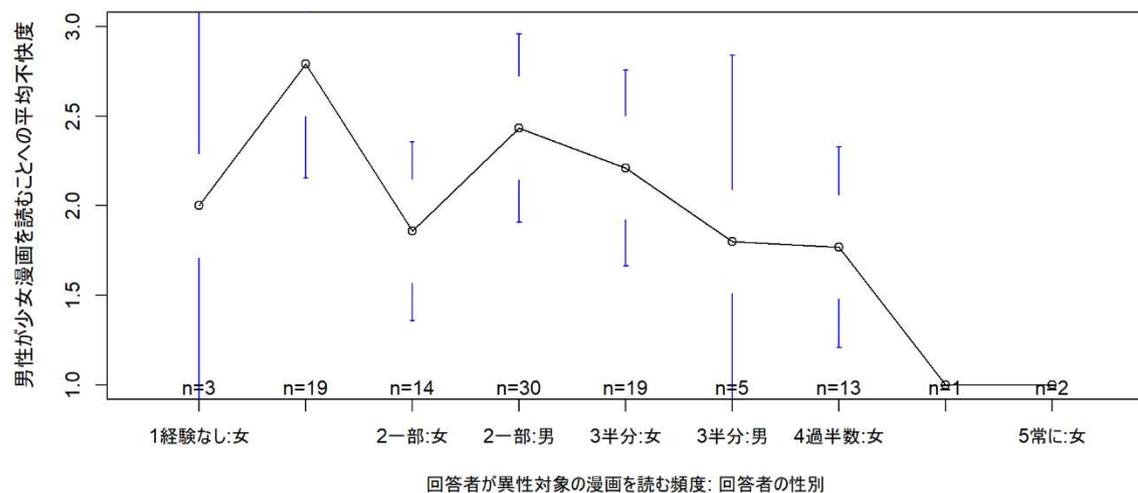


図 10. 回答者の性別と异性を対象とした漫画を読む頻度別の、男性が少女漫画を読むことに対する平均不快度

衣服では行動主体が女性であるときに比べて行動主体が男性であるときの方が、同程度の経験をもつ回答者の平均不快度の男女差が大きかった。相関係数は行動主体が女性るとき-0.385 (p 値は 0.000)、行動主体が男性るとき-0.296 (p 値は 0.002) でどちらも有意であった。また、Tukey-Kramer 法による多重比較で有意差が生じたのは、行動主体が女性であるときの、「経験なし」と回答した男性と「時々」と回答した女性間 (p 値は 0.019)、行

動主体が男性であるときの、「時々」と回答した男性と「経験なし」と回答した女性間（p 値は 0.027）、「時々」と回答した男性と「経験なし」と回答した男性間（p 値は 0.011）であった。

雑誌でも衣服の場合と同様の傾向がみられた。相関係数は行動主体が女性るとき 0.004（p 値は 0.966）、行動主体が男性るとき -0.168（p 値は 0.081）でどちらも有意ではなかった。また、Tukey-Kramer 法による多重比較で有意差が生じたのは、行動主体が女性であるときの、「一部」と回答した女性と「経験なし」と回答した女性間（p 値は 0.031）、「経験なし」と回答した男性と「経験なし」と回答した女性間（p 値は 0.002）、行動主体が男性であるときの、「一部」と回答した男性と「経験なし」と回答した女性間（p 値は 0.032）であった。

漫画では、行動主体が女性であるときは、少年漫画を読んだことのない女性の回答を除いて、回答者のジェンダー越境的行動経験に関わらずほぼ横ばいの結果になったのに対し、行動主体が男性である場合は回答者のジェンダー越境的行動経験が多いほど、概ね平均不快感は低くなった。行動主体が男性である方が回答者の男女差に開きがあったという点では、衣服や雑誌と同じ傾向にあるといえる。相関係数は行動主体が女性るとき -0.256（p 値は 0.007）、行動主体が男性るとき -0.242（p 値は 0.012）でどちらも有意であった。また、Tukey-Kramer 法による多重比較で有意差が生じたのは、行動主体が女性であるときの、「一部」と回答した女性と「経験なし」と回答した女性間（p 値は 0.001）、「半分」と回答した女性と「経験なし」と回答した女性間（p 値は 0.000）、「過半数」と回答した女性と「経験なし」と回答した女性間（p 値は 0.000）、「経験なし」と回答した男性と「経験なし」と回答した女性間（p 値は 0.003）、「一部」と回答した男性と「経験なし」と回答した女性間（p 値は 0.001）、「半分」と回答した男性と「経験なし」と回答した女性間（p 値は 0.003）であり、行動主体が男性であるときは有意差は生じなかった。

5. 2. 2. 回答者の男性文化優位意識

問 3 で得た、回答者の男性文化優位意識のデータを基に、ジェンダー越境的行動の許容度への男性文化優位意識の影響を分析した。対象項目は、衣服、漫画、雑誌の 3 つであり、問 1 のジェンダー越境的行動への不快感の質問のうち、それぞれの項目と合致するものだけを抽出し、さらに行動主体者の性別で分類して分析を行った。なお、こちらも平均値の差の検定は Tukey-Kramer 法による多重比較の手法を採った。

結果は以下の図 11 から図 16 の通りである。

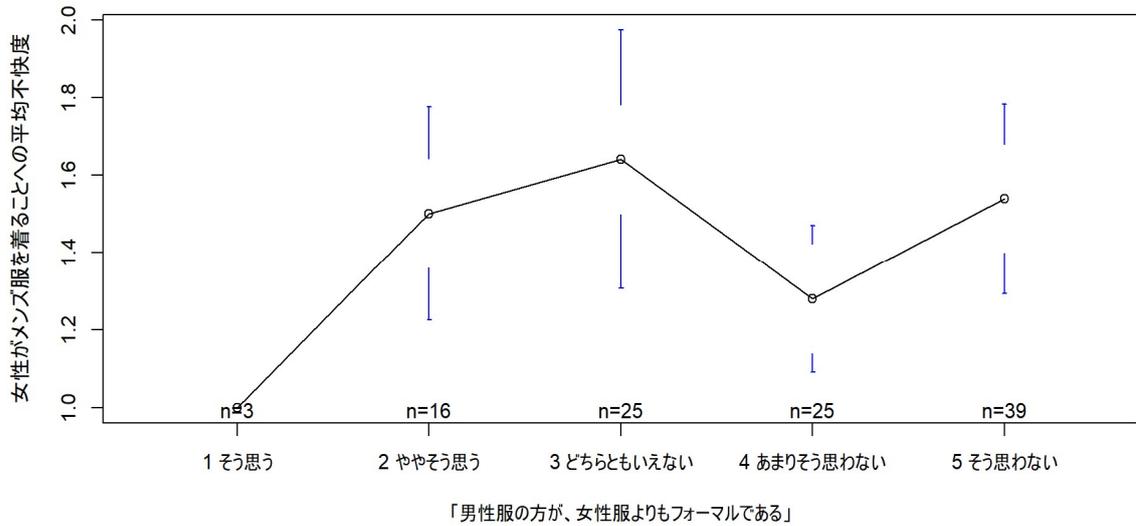


図 11. 「男性服の方が、女性服よりもフォーマルである」に対する回答者の男性文化優位意識別の、女性がメンズ服を着用することへの平均不快感

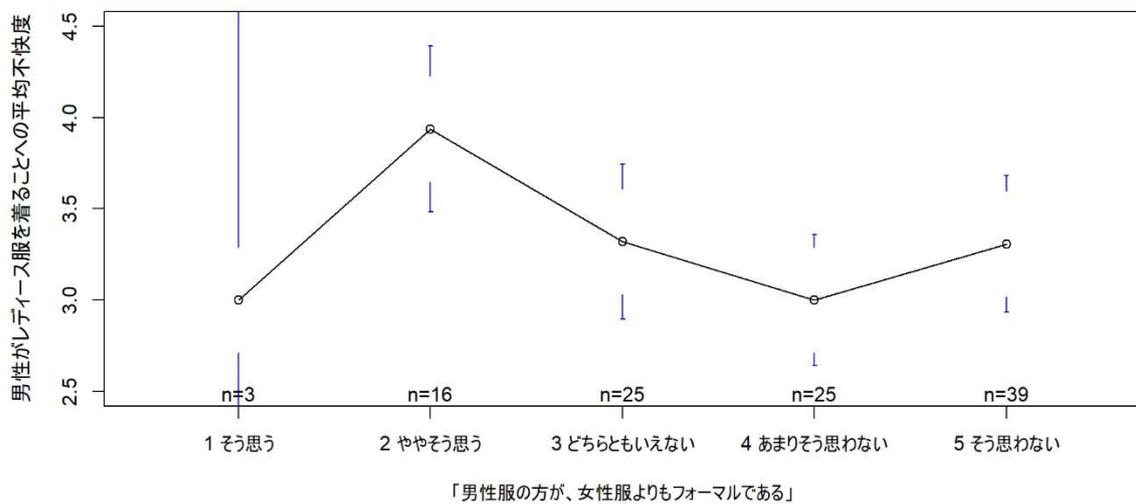


図 12. 「男性服の方が、女性服よりもフォーマルである」に対する回答者の男性文化優位意識別の、男性がレディース服を着用することへの平均不快感

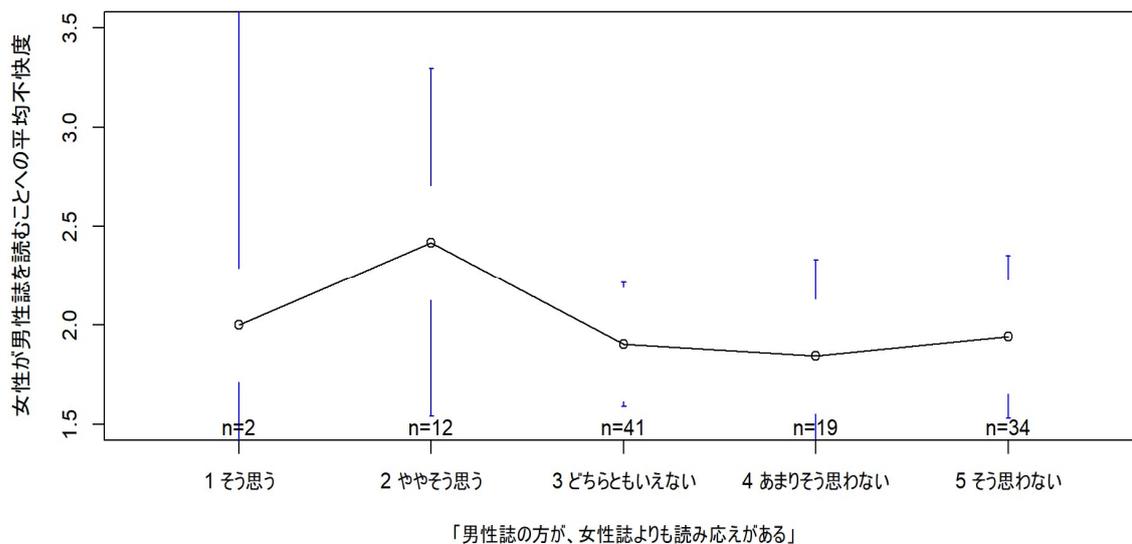


図 13. 「男性誌の方が、女性誌よりも読み応えがある」に対する回答者の男性文化優位意識別の、女性が男性誌を読むことへの平均不快感

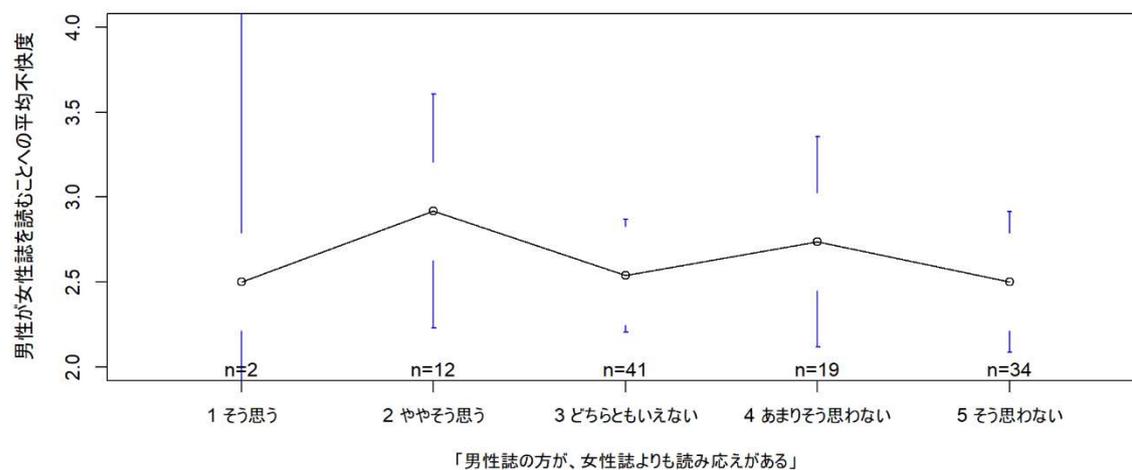


図 14. 「男性誌の方が、女性誌よりも読み応えがある」に対する回答者の男性文化優位意識別の、男性が女性誌を読むことへの平均不快感

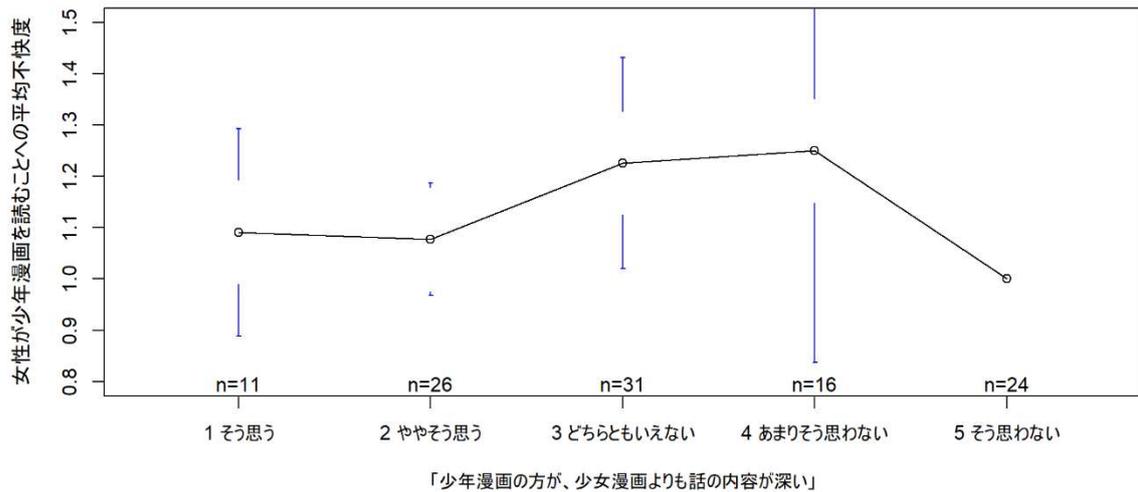


図 15. 「少年漫画の方が、少女漫画よりも話の内容が深い」に対する回答者の男性文化優位意識別の、女性が少年漫画を読むことへの平均不快感

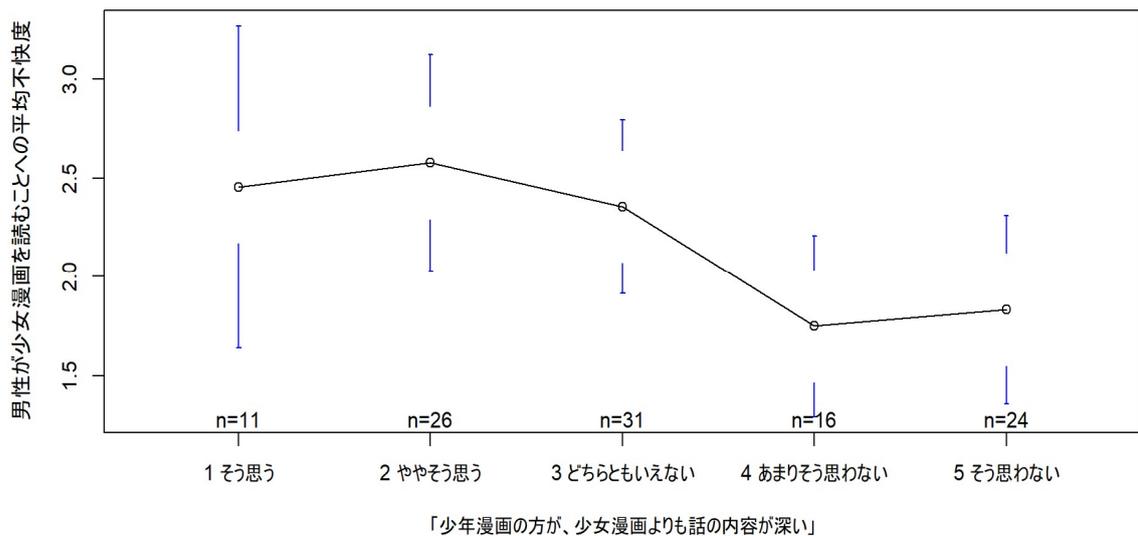


図 16. 「少年漫画の方が、少女漫画よりも内容が深い」に対する回答者の男性文化優位意識別の、男性が少女漫画を読むことへの平均不快感

ジェンダー越境的行動の主体者が男性の場合は、衣服、雑誌、漫画の全てを通して「ややそう思う」と回答した者の平均不快感が最も高く、それ以降は「そう思わない」に向けて平均不快感が低くなる傾向がみられた。一方主体者が女性の場合に関しては、特に共通した傾向はみられなかった。

また有意差が生じていたのは、「男性がレディース服を着る」場合の「あまりそう思わない」と「ややそう思う」のみで（p値は0.044）、その他の項目間に有意差はなかった。

結果に有意な差がみられなかったことから、「男性文化優位意識の高い回答者ほど男性がジェンダー越境的行動をすることにに対して許容度が低くなる」という仮説は支持されなかったが、ジェンダー越境的行動の主体者が男性の場合はグラフの形状に一様の傾向がみられたのに対し、女性の場合はそうした傾向がみられなかったことから、「女性が行うことに関しては男性文化優位意識は許容度に影響しない」という仮説は支持されたのではないかと考える。

5. 2. 3. 回答者の異性との交友割合

問4で得た回答者の異性との交友頻度が、ジェンダー越境的行動の許容度にどのように影響しているのかを分析した。平均値の差の検定はTukey-Kramer法による多重比較の手法を採った。

結果は以下図17から図20の通りである。なお、分析はロングデータで行っており、各人につき不快感を尋ねた問1の項目が8つあるため、図中のnは実際の回答数の8倍になっている。

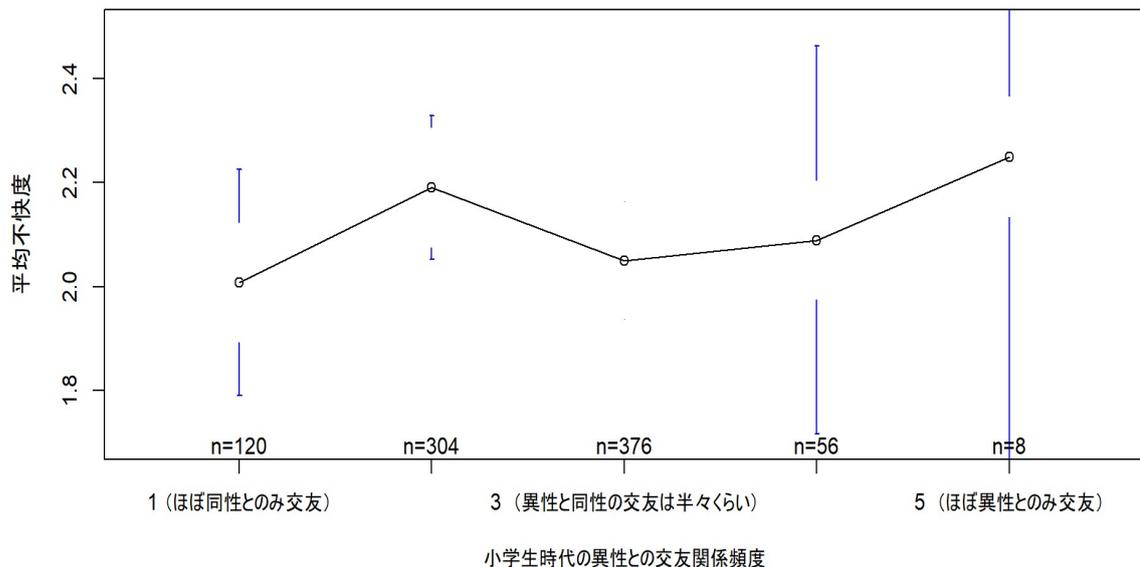


図 17. 小学生時代の異性との交友関係頻度別の、他者のジェンダー越境的行動への平均不快感

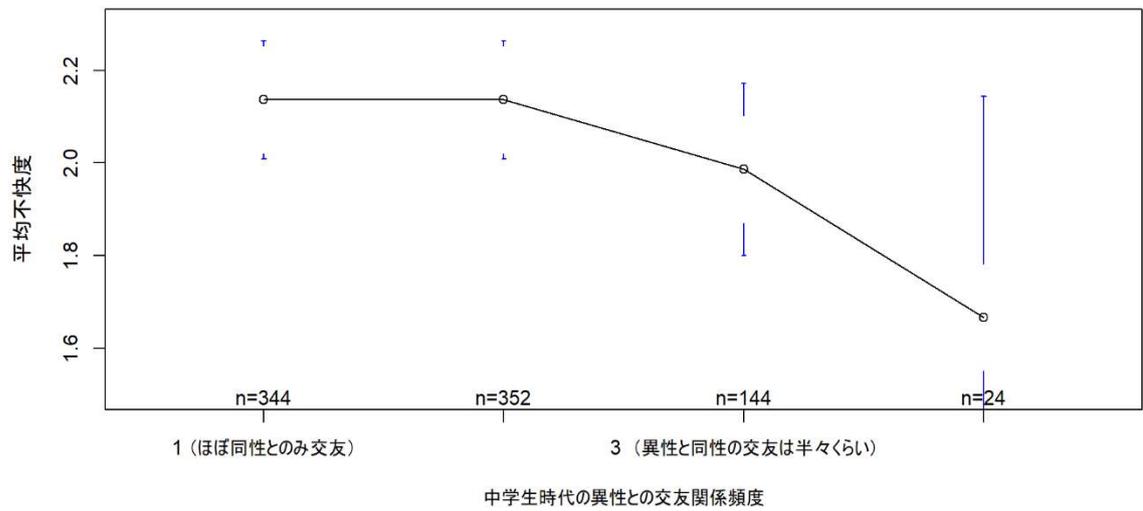


図 18. 中学生時代の異性との交友関係頻度別の、他者のジェンダー越境的行動への平均不快感

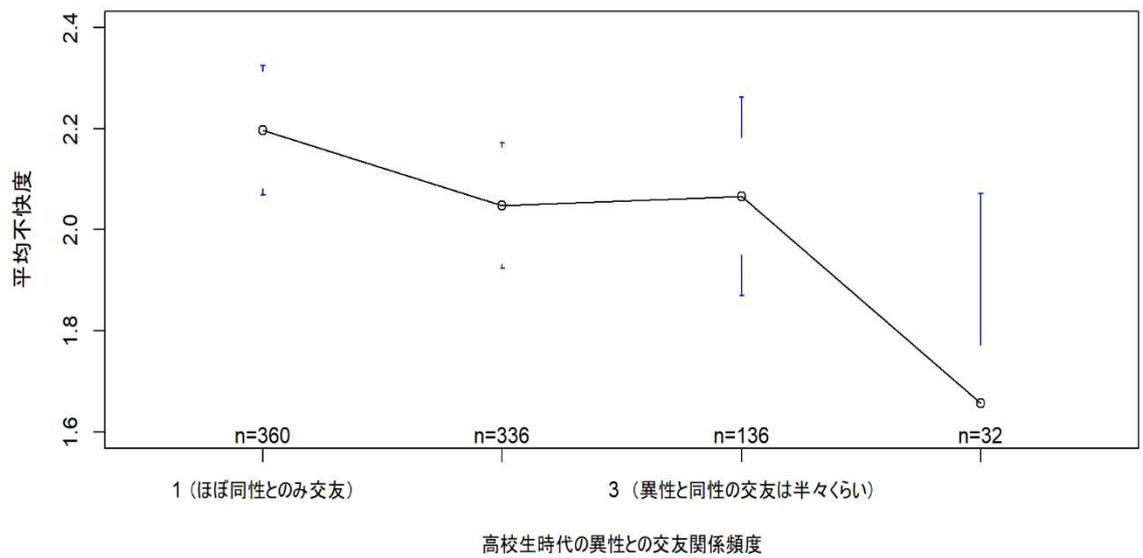


図 19. 高校生時代の異性との交友関係頻度別の、他者のジェンダー越境的行動への平均不快感

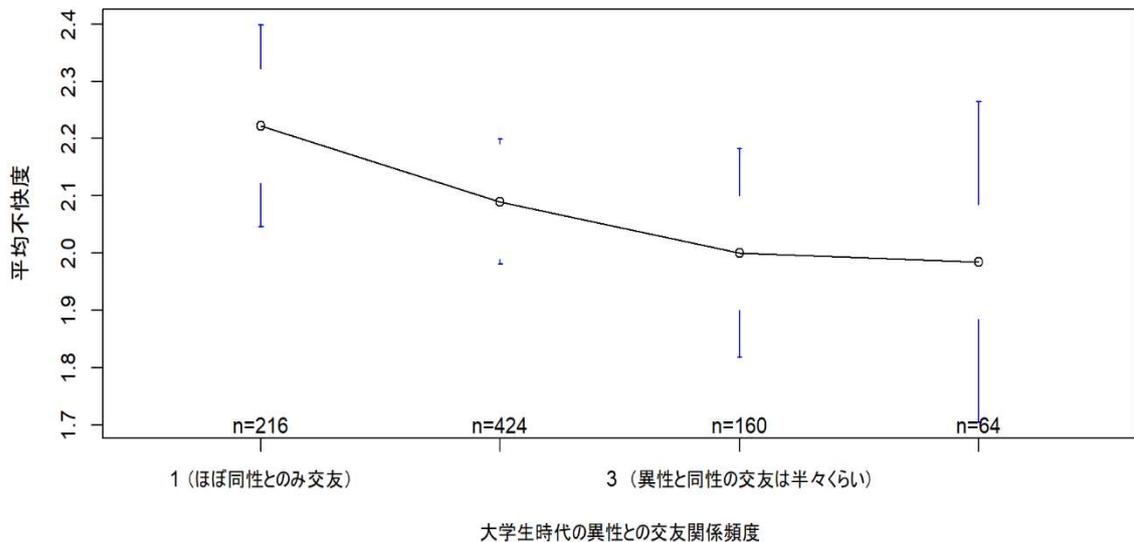


図 20. 大学生時代の異性との交友関係頻度別の、他者のジェンダー越境的行動への平均不快感

小学生時代では、グラフがほぼ右肩上がり、つまり異性との交友頻度が多いほどジェンダー越境的行動への許容度は低くなったのに対し、中学生時代以降のグラフはほぼ右肩下がり、つまり異性との交友が多いほど許容度は低くなった。しかし、全ての項目間において有意差は認められなかった。そのため、「異性との関わりが多いほど異性文化への参入に対する許容度が高くなる」という仮説が支持されたとはいえない結果となったが、今回の調査の対象者においては、ある程度仮説に沿うような傾向がみられた。

5. 2. 4. 回答者の男女別学経験

問 4 で得た回答者の男女別学の学校に在籍した経験が、どのようにジェンダー越境的行動の許容度に影響するのかを分析した。なお、この質問は複数回答ができ、幼稚園から小学校、中学校、高校までをすべて男女別学校だったと回答した者が 1 名 (男性 1 名)、中学校のみ男女別学校だったと回答した者が 2 名 (男性 2 名)、中学校と高校が男女別学校だったと回答した者が 15 名 (男性 8 名、女性 7 名)、高校のみ男女別学校だったと回答した者が 6 名 (男性 4 名、女性 2 名) であった。残りの回答者はすべて男女別学経験がなかったと回答した。

結果は以下の図 21 の通りである。なお、この分析もロングデータで行っており、各人につき不快感を尋ねた問 1 の項目が 8 つあるため、図中の n は実際の回答数の 8 倍になって

いる。

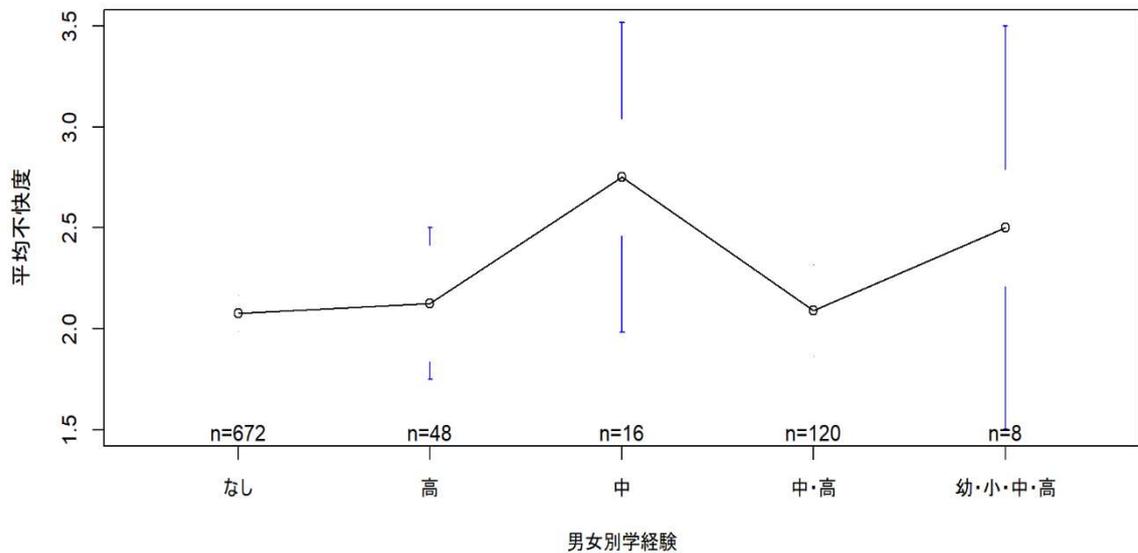


図 21. 男女別学経験別の、他者のジェンダー越境的行動への平均不快感

中学のみ男子校だったと回答した者の平均不快感が最も高くなり、次いで幼稚園から高校までを男子校だったと回答した者の平均不快感が高い数値を示し、中・高を男女別学校だったと回答した者と、高校のみ男女別学校だったと回答した者の平均不快感はほぼ同じくらいとなった。ただし、いずれの項目間においても有意差はみられなかった。男女別学経験がない回答者の平均不快感が最も低くなったことは、「異性との関わりが多いほど異性文化への参入に対する許容度が高くなる」という仮説に合致する結果であったが、中学のみ男女別学であった回答者の平均不快感よりも中学から高校までが男女別学であった回答者の平均不快感の方が低くなったことは、仮説を支持しない結果となった。加えて、中学から高校まで男女別学であった回答者の平均不快感と高校のみ男女別学であった回答者の平均不快感の差は、中学から高校まで男女別学であった回答者の平均不快感と中学のみ男女別学であった回答者の平均不快感の差よりも小さいことから、「小・中学生までの経験が最も大きな影響を与えるのではないか」という仮説も支持されなかった。

また、中・高を男女別学校だったと回答した者と高校のみ男女別学校だったと回答した者においては、男女別でのジェンダー越境的行動への平均不快感を算出した。その結果、中・高が男子校であった者の平均不快感は 2.172、中・高が女子校だった者の平均不快感は 2.000、高校のみ男子校だった者の平均不快感は 2.343、高校のみ女子校だった者の平均不

快度は 1.688 であった。

5. 2. 5. 回答者のきょうだい構成

回答者のきょうだい構成が、ジェンダー越境的行動への許容度にどのような影響を及ぼしているのかを分析した。

ここでは、「異性との関わりが多いほど、他者のジェンダー越境的行動への許容度が高くなる」という仮説の正誤を明らかにするため、回答者のきょうだい構成における同性のきょうだいと異性のきょうだいの数に着目した。そのため、性別を問う質問で「回答しない」と答えた 2 名の回答は分析の対象外とした。

きょうだい構成の指標として、回答者のきょうだいの同性・異性比率を、回答者自身を含めてカウントした。たとえば回答者が男性であるとき、一人っ子であれば「なし」、回答者に妹が 1 人いれば同性（自分）と異性（妹）が 1 人ずつの混合構成になるため「混合・等しい（混・等）」に分類し、回答者に兄と姉がいれば同性（自分と兄）と異性（姉）の混合構成となるため「混合・同性が多い（混・同）」に分類した。同様にして、男性回答者に姉と妹がいれば「混合・異性が多い（混・異）」、回答者に弟のみがいれば「同性のみ」となる。また、男性回答者に兄と姉と妹がいれば、その場合は「混合・等しい」となった。つまり、回答者のきょうだいを本人を含めて、同性のみか異性がいるかで分類し、さらに異性がいる場合は、回答者の性別に対して異性と同性のどちらが多いかで分類した。

なお、きょうだい構成を尋ねる質問では、4 章 2 節で述べたように、年齢の高いきょうだいから数えて 5 人目までを回答するよう指示したが、4 人目、5 人目を回答した者はいなかったため、全ての回答者の、全てのきょうだいについての回答を得たことになった。

この分析もロングデータで行っており、図中の n は実際の回答数の 8 倍になっている。

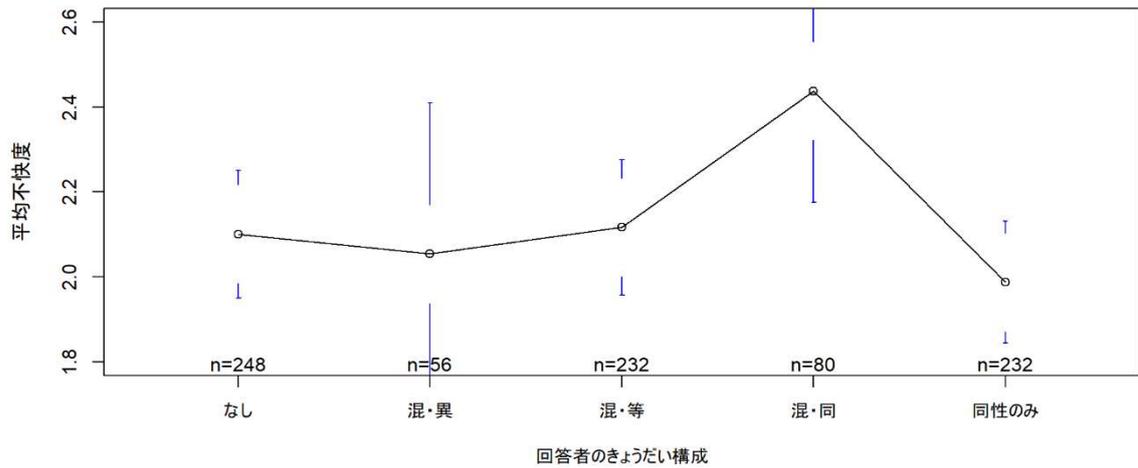


図 22. 回答者のきょうだい構成別の、他者のジェンダー越境的行動への平均不快感

平均不快感は、きょうだい自分が自分を含め同性のみの場合が最も低くなり、自分を含めたきょうだいに異性がいるが、自分と同性のきょうだいの数の方が多く場合が最も高くなった。また、一人っ子の場合と、異性のきょうだいと同性のきょうだいの数が等しい、あるいは異性のきょうだいの方が多く場合の平均不快感はほぼ横ばいであった。有意差が生じたのは、同性のみと同性異性混合で同性の方が多く場合の 2 項目間のみであった (p 値は 0.042)。よって、「異性との関わりが多いほど異性文化への参入に対する許容度が高くなる」という仮説は部分的に支持されたといえる。

また、きょうだい構成による、回答者自身のジェンダー越境的行動の経験についても分析を行った。問 2 の回答に対し、「全く経験がない」に数値 1 を、「時々異性を対象とした衣服を着る / 読む雑誌の一部は異性を対象としたものである / 読む漫画の一部は異性を対象としたものである」に数値 2 を、「半分くらい異性を対象とした衣服を着る / 読む雑誌の半分程度は異性を対象としたものである / 読む漫画の半分程度は異性を対象としたものである」に数値 3 を、「高い頻度で異性を対象とした衣服を着る / 読む雑誌の過半数が異性を対象としたものである / 読む漫画の過半数が異性を対象としたものである」に数値 4 を、「衣服は常に異性を対象としたものを着る / 雑誌は異性を対象としたものしか読まない / 雑誌は異性を対象としたものしか読まない」に数値 5 を与えた。この操作により、ジェンダー越境的行動の頻度が高いほど、高い数値を獲得することになった。今回の分析では、異性を対象とした衣服を着る、雑誌を読む、漫画を読むの 3 項目を合わせて、きょうだい構成べつの数値の平均値を算出し、また Tukey-Kramer 法による多重比較でその差を検定した。

この結果が以下の表 5 である。

表 5. ジェンダー越境的行動経験の数値の平均値（きょうだい構成別）

	なし	混・異	混・等	混・同	同性のみ
平均値	1.978	1.810	1.793	1.700	1.885

きょうだいがいない回答者がもっともジェンダー越境的行動をとる頻度が高く、異性・同性混合のきょうだい構成かつ同性のきょうだいの方が多い回答者の行動頻度が最も低くなった。しかし、いずれの場合においても有意差はみられなかった。

5. 2. 6. ジェンダー越境的行動への許容度に対する回答者の所属集団の影響

5 章 2 節の 3 項から 5 項に渡って、「回答者のジェンダー観を形成するに当たって、それぞれが属してきた集団はどのように影響するのか」という仮説を検証するため、回答者の交友環境、学校環境、家族環境のそれぞれがジェンダー越境的行動への許容度にどのように関わっているのかを調べた。ここではさらに、この 3 つの変数を用いて重回帰分析を行った。

この分析をするにあたって、いくつかデータ操作を行った。まず、小学校から大学までの各時代の交友関係について尋ねた質問の回答において、それぞれ「1（ほぼ同性とのみ交友）」に数値 1 を、「2（異性と交友するが同性の方が多い）」に数値 2 を、「3（異性と同性の交友は半々くらい）」に数値 3 を、「4（同性と交友するが異性の方が多い）」に数値 4 を、「5（ほぼ異性とのみ交友）」に数値 5 を与えた。この操作により、異性との交友頻度が高いほど、高い数値を獲得することになった。

また、きょうだい構成を尋ねた質問の回答において、回答者を含めたきょうだい構成のうちの異性の割合を数値化した。たとえば、同性のみのきょうだい構成である場合と一人っ子である場合は数値 0 を、3 人きょうだいのうち異性が 1 人ならば数値 0.33、異性と同性が同数ならば数値 0.5 を与えた。なお、この操作を行うため、今回の分析には性別を問う質問で「回答しない」を選択した回答者 2 名のデータは除いている。

回帰分析の結果は以下の表 6 の通りである。

表 6. ジェンダー越境的行動への許容度に対する回答者の所属集団の影響の重回帰分析

```

=====
                                Model 1
                                -----
(Intercept)                    2.29 ***
                                (0.16)
男女別学：高校のみ             -0.01
                                (0.18)
男女別学：中学のみ             0.64 *
                                (0.31)
男女別学：中・高               -0.17
                                (0.14)
男女別学：幼・小・中・高       0.30
                                (0.43)
きょうだい構成                 0.15
                                (0.17)
小学時代の交友関係             0.05
                                (0.06)
中学時代の交友関係            -0.01
                                (0.08)
高校時代の交友関係            -0.16 *
                                (0.07)
大学時代の交友関係            -0.02
                                (0.06)
                                -----
R^2                             0.02
Adj. R^2                        0.01
Num. obs.      848 (106人×8項目)
=====

```

*** p < 0.001; ** p < 0.01; * p < 0.05

有意となったのは「中学のみ男女別学」と、「高校時代の交友関係」であったことから、他者のジェンダー越境的行動への許容度に対して、中学のみ男女別学であることと、高校時代の異性との交友関係が影響を及ぼしていることが分かった。

6. 考察

6. 1. ジェンダー越境的行動に対する許容度の非対称性

表1の結果より、ジェンダー越境的行動の許容度に非対称性が生じることが確認できた。このことは「男性が女性文化に参入する方が、女性が男性文化に参入するよりも否定的な評価を得る」という仮説を支持する結果であった。

ジェンダー越境的行動への許容度の特徴として、ジェンダー越境的行動の主体者の性別による許容度の違いが、衣服の着用に対して最も大きくなったことが挙げられる。男性の女性的な装いや化粧が受け入れられがたいことは、2章2節で取り上げた先行研究の中でも指摘されているが、この要因としては、男性が女性服を身につけることはしばしばからかいの対象として扱われてきたことが挙げられるのではないかと考える。仲間内の冗談として女装をさせてみたり、あるいは罰ゲームやある種の見世物として女装が用いられたりすることは珍しいことではないだろう。そうした慣習が、「男性による女装＝非日常的なこと・恥ずべきこと」といったイメージを人々に抱かせており、今回の調査で行動の主体者の性別で大きな差が生じたのではないかと推察する。

また、表2の回答者の性別ごとの結果では、全ての差が有意とはならなかったものの、衣服、漫画、玩具に対しては行動の主体者の性別に関わらず、男性回答者の方が女性回答者よりも許容度が低くなり、雑誌に関してのみ女性回答者の方が許容度が低くなったことが興味深い。回答者の性別とジェンダー越境的行動の主体者の性別に交互作用効果がみられなかったことも踏まえると、人々が他者のジェンダー越境的行動を評価するとき、自分自身の性別と照らし合わせて、同性あるいは異性のどちらか一方を鼻負したり、逆に厳しい目で見たりするのではなく、あくまで対象となる行為と行為の主体者の性別に焦点を当てているといえるだろう。

さらにここで、回答者の性別による有意差がみられた4項目（「女性がメンズの衣服を着用する」、「女性が男性誌を読む」、「男性が女性誌を読む」、「男性が少女漫画を読む」）について考察を深めたい。まず女性がメンズ服を着用することにおいて、男性回答者の方が女性回答者よりも許容度が低くなったことに関して、当事者である女性たちと外からみてい

る男性たちとの間に認識の差が生じるためではないかと考える。関西のショッピングモールを中心にメンズやレディースのカジュアルウェア店舗を展開している「リレーション」のブログには、女性がメンズ服を選んだ理由として「ゆったりした服が好き」「カジュアルなスタイルが好き」「女性らしいファッションが面倒」などを挙げている。レディース服は身体のラインに沿うようなぴったりとした服や、装飾やアイテムが多い服など、機能的ではないデザインの服が多くある。また、おしゃれのためとして冬でもミニスカートやオフショルダーの服を着るなど、男性ファッションと対比しての女性ファッションはしばしば機能性よりも見た目を重視される。女性たちはレディース服の機能性の低さを知っているからこそ、他の女性がメンズ服を着ていても、レディース服よりメンズ服を選ぶ心理が理解できる。しかし実際にレディース服を着たことのない男性たちは見た目のみを重視し、メンズ服よりも華美なレディース服を女性たちが着用しないことに疑問や違和感を抱くのではないだろうかと考える。

雑誌に関しては、今回の調査で唯一女性回答者の方が男性回答者よりも有意に高い平均不快感をつけた。雑誌は男女ファッション誌から、園芸や自動車などの趣味に関するもの、カメラやコンピューターなどの専門的なものまで、その種類は多岐に渡る。ここで、楽天市場の週間人気ランキング（2022年12月5日から12月11日集計）を見てみると、女性誌のトップ5は順に、『anan 2022年12/21号』、『CREA 2023年1月号』、『anan 2022年12/14号』、『クロワッサン 2022年12/25号』、『大人のおしゃれ手帖 2023年1月号』であり、男性誌のトップ5は順に、『DIME 2023年2・3月合併号』、『POPEYE 2023年1月号』、『DIME 2023年1月号』、『MonoMaster 2023年1月号』、『昭和50年男 2023年1月号』であった。女性誌ではファッションや暮らしに関する雑誌が人気なのに対し、男性誌ではビジネスに関する雑誌や趣味に関する雑誌が人気上位にランクインしていることが分かる。もちろん、今回の調査とこの調査では対象となる層が違い、また必ずしも女性誌を女性が、男性誌を男性が買っているわけではないが、女性と男性で購読する雑誌が異なっていることが雑誌において女性の方が許容度が低くなった要因の1つではないかと考える。つまり、ファッション誌を中心に購読する女性は、男性が女性ファッションの雑誌を買うことを念頭に回答し、趣味に関する雑誌を購読する男性は、女性がそうした雑誌を買うことを念頭に回答したために、カテゴリー間でのジェンダー越境的行動への許容度差が男女差として生じた可能性があると考えられる。

男性が少女漫画を読むことに関しては、衣服と同じく、実際に少女漫画を読んだことが

ある女性たちと、少女漫画を読んだことがない男性たちの間でジェンダーステレオタイプに差が生じているからではないだろうか。少女漫画を読み、それに感動したり熱中した経験を持ったりした女性ならば、たとえ男性であっても少女漫画を好む理由を理解できるが、少女漫画を読んだことがない男性たちにとっては理解しがたく違和感を覚えるのではないかと考える。

6. 2. ジェンダー越境的行動に対する許容度の非対称性を構築する要因

6. 2. 1. ジェンダー越境的行動の経験

ジェンダー越境的行動の頻度の平均値から、ジェンダー越境的行動に対する非対称性は他者への許容度のみならず、本人の行動にも現れていることが明らかになった。特に男性において、他者への許容度が自身にも内面化されているのだろう。

ジェンダー越境的行動の頻度がジェンダー越境的行動への許容度に及ぼす影響については、有意であった相関係数も比較的小さく、また全ての結果の差が有意ではなかったので必ずしもジェンダー越境的行動経験があればあるほど、他者のジェンダー越境的行動への許容度が高くなるとはいえないという結果となった。しかし、衣服の着用に関して、「半分くらい異性を対象とした衣服を着る」「高い頻度で異性を対象とした衣服を着る」と回答した人は12人（全体の11.1%）のみであったことと、「経験なし」よりも「時々異性用の衣服を着る」方が有意に許容度が高かったこと、加えて雑誌を読むことに関して、「読む雑誌の半分程度は異性を対象としたものである」「読む雑誌の過半数が異性を対象としたものである」と回答した人は6人（全体の5.6%）のみであったことと、「経験なし」よりも「読む雑誌の半分程度は異性を対象としたものである」方が有意に許容度が高かったことを踏まえると、自身がジェンダー越境的行動をしていない場合と程度に関わらずそうした行動を取っている場合では、経験が有る方が許容度が高くなる傾向はあるのではないかと考える。

さらにカテゴリーを細かく分類して分析した図5から図10では、衣服、雑誌、漫画のいずれにおいても、行動主体が女性より男性である方が、同じ経験で比べたときの回答者の性別による差が大きくなったことに関して、回答者が男性でも女性でも、行動主体者が男性であるときの方が平均不快感を高くつけていることから、女性回答者は自身がジェンダー越境的行動を経験している場合、他の女性のジェンダー越境的行動への態度は軟化するが、他の男性のジェンダー越境的行動への態度は軟化しないのではないかと考える。反対

に男性は、自身がジェンダー越境的行動をしているからといって、他の男性のジェンダー越境的行動への態度が他の女性のそれよりも軟化するということはないことがうかがえる。全体的に男性の方が女性よりも、自己にも他者にもジェンダー越境的行動への許容度が低い傾向にあり、自身がジェンダー越境的行動をとっていても、どこかで後ろめたさや逸脱の意識を感じているのかもしれない。そのため、女性と違って男性はジェンダー越境的行動を経験していたとしても、他者に対しての許容度は軟化しないのではないかと考える。

6. 2. 2. 男性文化優位意識

「男性が少女漫画を読む」場合の一部を除いて、有意差が生じないという結果となった。男性文化優位意識を尋ねた質問の回答を見ても、「少年漫画の方が、少女漫画よりも話の内容が深い」との質問に対して「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人は37人（全体の34.3%）であったが、「男性誌の方が、女性誌よりも読み応えがあったり役に立ったりする」との質問に対して「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人は14人（全体の13.0%）、「男性服の方が、女性服よりもフォーマルである」との質問に対して「そう思う」または「ややそう思う」と回答した人は19人（全体の17.6%）と、2割を下回っていた。ほとんどの人が男性文化優位意識を抱いていないことが、今回の結果の要因であると推察する。ゆえに、ジェンダー越境的行動への許容度に非対称性が生じるのは、男性文化の方が女性文化よりも優れているとする男性文化優位意識によるものではなく、上野（2010）が指摘した男性のみに性の揺らぎが存在することに起因するのかもしれない。ただし、今回の質問が男性文化優位意識を適切に尋ねられていないことも考えられる。この点は今後検討したい。

6. 2. 3. 異性との交友頻度

5章2節3項の結果を見ると、小学生時代の交友関係では、「異性と交友するが同性の方が多し」と回答した人のジェンダー越境的行動への平均不快感が「異性と同性の交友は半々くらい」「同性と交友するが異性の方が多し」と回答した人の平均不快感よりも高くなったのに対し、中学生時代以降はほぼ、異性との交友頻度が多いほど平均不快感が低くなった。今回の調査では有意な差はみられなかったため普遍的に考察することはできないが、今回の回答者群だけで考えるならば、中学生くらいの年齢における異性との交友頻度がジェンダー越境的行動への許容度に影響しているのではないかと推察する。

確かに、小学生の頃よりも中学生の頃の方が社会的な男女の区別に晒される機会が増える。たとえば、少し前までは制服といえば男子はズボン、女子はスカートの一択であったし、体育での課題が男子と女子で異なることもある。こうした制度が中学生でみられることが、中学生の頃にジェンダー観が確立される要因の1つなのではないかと考える。

6. 2. 4. 男女別学経験

今回の調査では別学校に通った経験があると回答した者が少なく、有意差はみられなかった。しかし幼稚園から別学校に通っていたと回答した者と、中学校のみ別学校に通っていたと回答した者の平均不快感の方が、高校のみ別学校に通っていたと回答した者の平均不快感よりも高い傾向にあり、今回の調査対象者だけみれば一見、中学までの別学経験が回答者のジェンダー越境的行動への許容度に影響しているのではないかと考えられる。しかしそう考えた場合に説明がつかないのが、中・高で別学校に通っていたと回答した者の平均不快感が高校のみ別学校に通っていたと回答した者と同程度であったことである。今回の調査の仮説通り、ジェンダー意識が中学までの経験に影響されるならば、中・高で別学校に通っていた者は中学のみ別学校に通っていた者と同程度の平均不快感になるはずだ。

そこで、ジェンダー意識と学校環境についての先行研究を新たに参照したい。

男女別学校に通った経験がジェンダー意識にどのように影響しているのかを調べた施行研究はいくつかあるが、その結果には男女別学と共学の違いはジェンダー意識に影響しないというものと、男子にのみ影響するとするものがある。伊藤葉子ら（2011:130）は男子校の中・高生の男女平等志向性について、「男子校と共学校男子の間に有意差は認められず、性差だけが有意であることが示され、男子校・共学校にかかわらず、男子よりも女子において、男女平等志向性が高い」と指摘しており、茂木輝順ら（2010:83-84）もまた、別学進学校の男女と共学進学校の男女、職業科高校の男女を調査した結果、文系/理系のジェンダー差意識に学校間での有意差はなく、性別役割分業観でも別学進学校女子は別学進学校男子や共学進学校男子よりも優位に平等意識が強かったものの、共学進学校女子と比べて有意差はなく、また男女全体でも別学校と共学校の間で大差はなかったことを明らかにしている。

その一方で、伊藤裕子（1997:35）は、共学（公立）と別学（私立）の高校生を対象とした研究で、女子の性差観に学校環境の影響はみられなかったが男子は男子校に在籍する者

の性差観の方が共学校に在籍する者に比べて有意に高かったことを明らかにし、翌年の研究（1998:252）でも、女子と比べて男子は共学・別学という学校環境が彼らの性差観に少なからず影響していることを確認している。

これらの先行研究を踏まえた上で、今回の結果の男女別回答者割合をみると、幼稚園から高校まで別学だったと回答した者と中学のみ別学だったと回答した者は男性のみ、中・高が別学だったと回答した者の男女比はほぼ半々、高校のみ別学であったと回答した者の内、男性は3分の2であった。つまり、ジェンダー越境的行動への平均不快感が高くなった2項目は回答者が男性のみであり、低かった2項目の回答者は男女混合であった。伊藤（1997・1998）がいうように男子学生のみが男女別学の影響を受けるのであれば、男女別に再度平均不快感を算出したとき、男性の方が女性よりも平均不快感が高くなり、特に中・高が別学だったと回答した男性の平均不快感は男性しか回答のなかった項目と同程度になるのではないかと考え、分析を行った。しかしその結果、確かに男性の方が女性よりも平均不快感は高くなったものの、男女混合の平均値とそれほど違いはなく、今回の全ての回答者の男女別平均でも男性回答者の方が女性回答者よりも平均不快感を高くつけていることを考えると、男子学生のジェンダー越境的行動への許容度が特別に男女別学という環境に影響を受けているとはいえないのではないかと思われる。よって、伊藤ら（2011）や茂木ら（2010）の指摘を支持する結果といえる。

男女別学であるからといって、教育内容に大きく差があるわけではなく、またきょうだいや学校外での異性との関わりも考えられるため、ジェンダー越境的行動への許容度にあまり影響しなかったのだろう。

6. 2. 5. 回答者のきょうだい構成

仮説では、異性との交流が多いほど、つまりここでは異性のきょうだいが多いほどジェンダー越境的行動への許容度が高くなるというものであったが、図22を見ると平均不快感が最も低くなったのはきょうだいが同性のみの場合であり、逆に最も高くなったのはきょうだいに異性を含み、かつ自分と同性のきょうだいの数の方が多い場合であったことから、仮説は支持されなかった。特にこの2項目は有意に差がついており、異性の文化に触れることの少ないであろう同性のみのきょうだいを持つ回答者の方が許容度が高いこととなる。

この点に関して、水島（1990:132-133）が幼児の本の選択におけるきょうだいの影響を調べた論文があり、そこではきょうだい関係の影響は強くはないが無視できない程度にあ

ること、異性のきょうだいの存在が本人と同性の幼児が好む本をより選択させることが明らかになっている。今回の結果も、異性のきょうだいがいることによって、かえって、きょうだいが同性のみの場合よりもジェンダー差別化が意識されているのではないかと考える。

また、今回は有意な差は生じなかったものの、異性のきょうだいがいる場合に異性の数が多くなるほど平均不快感が低くなった、つまりは許容度が高くなったことについて、家族の中で異性の数の方が多くなると、そちらの性別の文化が主流となり、仮説通り異性の文化に触れる機会が多くなることで自身がジェンダー越境的行動を取りやすくなるが、自分と同性の数の方が多ければ、自分の性別の文化が主流となり、けれど少なからず異性文化が入ることで差別化を図ろうとする意図が高まるのではないかと考える。これを検証したのが5章2節5項の表5である。実際、異性のきょうだいがいる場合、異性の数が多いほどジェンダー越境的行動の経験も僅かながら多くなった。とはいえ、その差は微少であり、検定結果も有意ではなかったため、今後より詳しく調査する必要があるだろう。

6. 2. 6. ジェンダー越境的行動への許容度に対する回答者の所属集団の影響

重回帰分析の結果から、他者のジェンダー越境的行動への許容度に対して、中学のみ男女別学であることと、高校時代の異性との交友関係がより大きな影響を及ぼしていることが分かった。特に高校時代の異性との交友関係が影響を及ぼしていることについて、5章2節3項の結果と照らし合わせると、中学生の頃に異性・同性との交友関係に基づくジェンダー越境的行動への許容度が固まり始め、高校生の頃にそれぞれのジェンダー越境的行動への許容度がほぼ規定されるのではないかと推察する。3章で小・中学生までの経験がジェンダー越境的行動への許容度に最も大きな影響を与えるのではないかと仮説を立てたが、今回の結果からは、中学生から高校生の間の交友関係がジェンダー越境的行動への許容度に大きな影響を与えているといえるだろう。小学生の頃よりも中学生の頃の方が男女の区別が社会的に強くつけられることは先述したが、中学から高校にかけても、自分の将来のことを考えたり、あるいは恋愛などをしたりする中で、自分がどうあるべきかを見直す時期である。そのため、友人という身近な人々とのやり取りを通して自身のジェンダー観を固めるタイミングであるのだろう。

7. まとめ

本稿では、男性文化・女性文化におけるジェンダー越境的行動への人々の許容度に着目

し、研究を行った。その結果、男性が女性文化に参入する方が女性が男性文化に参入するよりも人々の許容度が低くなるという、男女で非対称的な評価となることが明らかになった。また、他者への許容度のみならず、実際にジェンダー越境的行動を経験する人も女性より男性の方が少ないという非対称性が認められた。男性が女性文化へ参入することを忌避する価値観は、内外の両側面に適応されているようだ。

また、ジェンダー越境的行動の経験の有無が他者のジェンダー越境的行動への許容度に影響を及ぼしていること、そして、自身に異性のきょうだいがおり、かつ同性のきょうだいの方が多き環境にあると、他者のジェンダー越境的行動への許容度は低くなることが分かった。加えて、ジェンダー越境的行動への許容度は高校での交友関係が有意に影響していた。

一方、異性との関わりの影響やきょうだい構成とジェンダー越境的行動の頻度の関係など、今回の調査の範囲では一定の傾向が見られたが、差が有意にならなかったものもいくつかあった。今後はより多くの回答者を募ったり、質問紙の内容を見直したりするなどして、さらに研究を深めることが必要だと考える。

これまでジェンダー問題の焦点は、男性に対する女性の格差をいかになくすかということに置かれていたように思われる。そしてそれは働き方などの社会制度によって是正されてきた。だが、個人の趣味趣向という社会制度の届かぬ領域では、むしろ男性の方が男であることに縛られていた。ジェンダーレス化が推し進められる今日、「男らしさ」や「女らしさ」ではなく、「自分らしさ」を追及するという意識を皆が共有することが必要であろう。

参考文献

- 團康晃, 2014, 「マンガ読書経験とジェンダー——二つの調査の分析から」『マス・コミュニケーション研究』85(0): 205-224.
- 飯野智子, 2013, 『男らしさ』とファッション・美容』『実践女子短期大学紀要』(34): 83-99.
- 池谷壽夫, 2016, 「第2章 男子は学校で損していないか!?!」池谷壽夫・市川季夫・加野泉(編)『男性問題から見る現代日本社会』はるか書房, 37-56.
- 石井照久・川邊聡子・今野大樹・松本勇紀・目黒耕平・立花希一・望月和枝, 2011, 「ジェンダーからみたマンガ——秋大生の視点から」『秋田大学教養基礎教育研究年報』

(13): 1-12.

伊藤葉子・倉持清美・堀内かおる, 2011, 「男子校中学・高校生の「保育教育に関連する意識」の調査——共学校との比較検討」『日本家政学会誌』62(2): 125-131.

伊藤裕子, 1997, 「高校生における性差観の形成環境と性役割選択——性差観スケール(SGC)作成の試み」『教育心理学研究』45(4): 396-404.

伊藤裕子, 1998, 「高校生のジェンダーをめぐる意識」『教育心理学研究』46(3): 247-254.

片岡栄美, 2005, 「文化定義のジェンダー化に関する研究——言説からみる文化活動への意味付与と性役割意識」『関東学院大学人文科学研究報』(29): 65-85.

水島かな江, 1990, 「幼児の本の選択にみる性差ときょうだい関係」『生活科学論叢』22: 111-135.

茂木輝順・橋本紀子・杉田真衣・良香織, 2010, 「高校生のジェンダー平等意識と将来観に関する調査研究——共学進学校・別学進学校・職業科高校の比較を通して」『女子栄養大学紀要』41: 77-87.

西岡敦子, 2012, 「男性の化粧品は受け入れられるのか——男性の化粧行動から——」『繊維製品消費科学』54(4): 332-338.

小川麻衣, 2018, 「ファッションとジェンダー —— "フェミ男"現象と『男らしさ』の考察」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』49: 49-56.

Pierre Bourdieu, 1998, *La Domination masculine*, Paris: Éditions du Seuil. (坂本さやか・坂本浩也訳, 2017, 『男性支配』藤原書店.)

楽天, 2022, 「【楽天市場】男性誌 | 人気ランキング 1 位～ (売れ筋商品)」
(<https://ranking.rakuten.co.jp/weekly/112413/>, 2022.12.19)

楽天, 2022, 「【楽天市場】女性誌 | 人気ランキング 1 位～ (売れ筋商品)」
(<https://ranking.rakuten.co.jp/weekly/112414/>, 2022.12.19).

R Core Team (2022). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. (<https://www.R-project.org/>, 2022.12.27).

Relation, 2021, 「かっこいい女性はメンズ服を着る!？」
(<https://coolbank.co.jp/2021/06/10/unisex-style/>, 2022.11.26).

高井範子・岡野孝治, 2009, 「ジェンダー意識に関する検討——男性性・女性性を中心に——」『太成学院大学紀要』11(0): 61-73.

- 谷本奈穂・西山哲郎, 2009, 「第三章 部族化するおしゃれな男たち——女性的な語彙と『男らしさ』の担保」 宮台真司・辻泉・岡井崇之 (編) 『「男らしさ」の快楽——ポピュラー文化からみたその実態』 勁草書房, 49-78.
- 多々納道子・若築純子, 2003, 「中学生のジェンダー観の形成要因」『島根大学生涯学習教育研究センター研究紀要』(2): 15-27.
- 鳥居千代香, 2004, 「日本におけるジェンダー研究の重要性」『帝京大学短期大学紀要』24: 17-51.
- 上野千鶴子, 2010, 『女嫌い——ニッポンのミソジニー』 紀伊國屋書店.
- 梅田弘子, 2022, 「乳幼児を育てる共働き夫婦が生活において最も困っていること テキストマイニングによる自由記述分析」『HIU 健康科学ジャーナル』1: 47-56.
- 全国家族調査 (National Family Research of Japan: NFRJ), 2022, 「第4回全国家族調査 (NFRJ18) 調査票」(https://nfrj.org/nfrj18_questionnaires_jpn.htm , 2022.10.27).

(400 字詰め原稿用紙 84 枚相当)

ジェンダー越境的行動に対する評価の調査

卒業論文執筆のため、京都大学の学生の皆様にジェンダー越境的行動について、簡単な調査へのご協力をお願いしております。

調査の結果は匿名で処理され、研究のためにしか利用されません。

どうぞ協力をよろしくお願いいたします。

大問は全部で4つあり、所要時間はおよそ5分です。

なお、本調査は京都大学の学生のみを対象としております。対象となる方のみご回答いただきますよう、お願い申し上げます。

*必須

問1

あなたは次の事柄に関して、それぞれどのくらい違和感を覚えますか。各問いで、当てはまる数字一つを選んでください。

質問文中の男性/女性は、あなたとは面識のない人物です。偶然その場面を見かけたときの第一印象を回答してください。

数字は以下のように、小さい数字ほど違和感を覚えないことを示します。

(全く違和感を覚えない) 1 2 3 4 5 (非常に違和感を覚える)

1. a. 女性がメンズの衣服を着用する *

1つだけマークしてください。

全く違和感を覚えない

1

2

3

4

5

非常に違和感を覚える

2. b. 男性がレディースの衣服を着用する *

1つだけマークしてください。

全く違和感を覚えない

1

2

3

4

5

非常に違和感を覚える

3. c. 女性が男性誌を読む *

1つだけマークしてください。

全く違和感を覚えない

1

2

3

4

5

非常に違和感を覚える

4. d. 男性が女性誌を読む *

1つだけマークしてください。

全く違和感を覚えない

1

2

3

4

5

非常に違和感を覚える

5. e. 女性が少年漫画を読む *

1つだけマークしてください。

全く違和感を覚えない

1

2

3

4

5

非常に違和感を覚える

6. f. 男性が少女漫画を読む *

1つだけマークしてください。

全く違和感を覚えない

1

2

3

4

5

非常に違和感を覚える

7. g. 女兒が男児用玩具で遊ぶ *

1つだけマークしてください。

全く違和感を覚えない

1

2

3

4

5

非常に違和感を覚える

8. h. 男児が女兒用玩具で遊ぶ *

1つだけマークしてください。

全く違和感を覚えない

1

2

3

4

5

非常に違和感を覚える

問2

あなた自身は今現在、次のような行動をとることがどの程度ありますか。
各問いで、自身の行動に最も近い数字一つを選んでください。

9. i. 異性を対象とした衣服を着用する *

1つだけマークしてください。

- 1 全く経験がない
- 2 時々異性を対象とした衣服を着る
- 3 半分くらい異性を対象とした衣服を着る
- 4 高い頻度で異性を対象とした衣服を着る
- 5 衣服は常に異性を対象としたものを着る

10. j. 異性を対象とした雑誌を読む *

1つだけマークしてください。

- 1 全く経験がない
- 2 読む雑誌の一部は異性を対象としたものである
- 3 読む雑誌の半分程度は異性を対象としたものである
- 4 読む雑誌の過半数が異性を対象としたものである
- 5 雑誌は異性を対象としたものしか読まない

11. k. 異性を対象とした漫画を読む *

1つだけマークしてください。

- 1 全く経験がない
- 2 読む漫画の一部は異性を対象としたものである
- 3 読む漫画の半分程度は異性を対象としたものである
- 4 読む漫画の過半数が異性を対象としたものである
- 5 漫画は異性を対象としたものしか読まない

問3

あなたは次の質問についてどう思いますか。
当てはまる数字一つを選んでください。

12. l. 少年漫画の方が、少女漫画よりも話の内容が深い *

1つだけマークしてください。

- 1 そう思う
- 2 ややそう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりそう思わない
- 5 そう思わない

13. m. 男性誌の方が、女性誌よりも読み応えがあったり役に立ったりする *

1つだけマークしてください。

- 1 そう思う
- 2 ややそう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりそう思わない
- 5 そう思わない

14. n. 男性服の方が、女性服よりもフォーマルである *

1つだけマークしてください。

- 1 そう思う
- 2 ややそう思う
- 3 どちらともいえない
- 4 あまりそう思わない
- 5 そう思わない

問4

あなたのことを教えてください。

15. o. 現在あなたが所属している学部を教えてください。*
* 院生の方は所属していた学部を選んでください。

1つだけマークしてください。

- 総合人間学部
 文学部
 教育学部
 法学部
 経済学部
 理学部
 薬学部
 工学部
 農学部

16. p. あなたの性別を教えてください。*

1つだけマークしてください。

- 男
 女
 回答しない

q. あなたのきょうだい構成（性別及び年の差）を教えてください。

* 自分を除いて、歳が上のきょうだいから順に教えてください（双子や、親の再婚などによる異父母の兄弟姉妹も含まれます）。

* 該当するきょうだいがいない場合は「なし」を選択してください。たとえば、一人っ子の方は最初の質問で「なし」を、自分の他にきょうだいが2人いる方は3人目のきょうだいの質問に「なし」と教えてください。

* 6人以上きょうだいがいる場合は、上から数えて5人目までを教えてください。

q1. 1番年上のきょうだい（あなたを除く）の性別

17。 *

1つだけマークしてください。

- 姉 質問 18 にスキップします
- 兄 質問 18 にスキップします
- 妹 質問 18 にスキップします
- 弟 質問 18 にスキップします
- なし 質問 27 にスキップします

q11. 1番年上のきょうだいとご自身の年齢差
*年齢が同じ場合は0歳を選択してください。

18. 1つだけマークしてください。

0歳

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

10歳以上

q2. 2番目のきょうだい（あなたを除く）の性別

19。

1つだけマークしてください。

- 姉 質問 20 にスキップします
- 兄 質問 20 にスキップします
- 妹 質問 20 にスキップします
- 弟 質問 20 にスキップします
- なし 質問 27 にスキップします

q22. 2番目のきょうだいとご自身の年齢差

*年齢が同じ場合は0歳を選択してください。

20。 1つだけマークしてください。

0歳

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

10歳以上

q3. 3番目のきょうだい（あなたを除く）の性別

21。

1つだけマークしてください。

姉

兄

妹

弟

なし 質問 27 にスキップします

q33. 3番目のきょうだいとご自身の年齢差

*年齢が同じ場合は0歳を選択してください。

22. 1つだけマークしてください。

0歳

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

10歳以上

q4. 4番目のきょうだい（あなたを除く）の性別

23。

1つだけマークしてください。

姉

兄

妹

弟

なし 質問 27 にスキップします

q44. 4番目のきょうだいとご自身の年齢差

*年齢が同じ場合は0歳を選択してください。

24. 1つだけマークしてください。

0歳

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

10歳以上

q5. 5番目のきょうだい（あなたを除く）の性別

25。

1つだけマークしてください。

姉

兄

妹

弟

なし 質問 27 にスキップします

q55. 5番目のきょうだいとご自身の年齢差

*年齢が同じ場合は0歳を選択してください。

26。 1つだけマークしてください。

0歳

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

10歳以上

r. 男子校/女子校に通った経験を教えてください (複数回答可)

27。 当てはまるものをすべて選択してください。

- 幼稚園
- 小学校
- 中学校
- 高校
- その他専門学校等
- なし

28。 s. これまでにどの程度異性と交友関係をもってきたか。（ご自身の感覚で構 *
いません）

*ここでの「交友」とは、一時的（一言二言のやり取りなど）・強制的（授業中に割り当てられたグループでのやり取りなど）ではなく、ご自身が積極的に行ったやり取りのことを指します。

1行につき1つだけマークしてください。

	1（ほぼ同性とのみ交友）	2（異性と交友するが同性の方が多）	3（異性と同性の交友は半々くらい）	4（同性と交友するが異性の方が多）	5（ほぼ異性とのみ交友）
1. 小学生時代	<input type="radio"/>				
2. 中学生時代	<input type="radio"/>				
3. 高校生時代	<input type="radio"/>				
4. 大学生時代	<input type="radio"/>				

以上でアンケートは終了です。
ご協力ありがとうございました。

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。

Google フォーム